帰国生 母の会
Friends

第 12 回シンポジウム

家族の風景 ‘２００５’

☆海外体験者が感じたこと☆

２００５年１１月１６日実施

主　催　　フレンズ　帰国生　母の会

後　援　　東京海上日動火災保険株式会社

目　次

Ⅰ　開催要項　・・・・・・・・・・・・・・・・3

Ⅱ　パネリストのプロフィール　・・・・・・・・・・・・・・・・4

Ⅲ　開会の挨拶
フレンズ　帰国生　母の会　代表　河村　京子　・・・5

東京海上日動火災保険株式会社　企業営業開発部支援グループ
グループリーダー　松田　誠太　・・・6

Ⅳ　シンポジウムの記録

家族の風景‘2005’　― 海外体験者が感じたこと ―

パネルディスカッション　第１部　・・・・・・・・・・・・・・・ 7
第２部　・・・・・・・・・・・・・・・17
第３部　・・・・・・・・・・・・・・・26

Ⅴ　参考資料「帰国生および保護者の事前アンケート」結果報告　・・・・・・・33

第 12 回シンポジウム

家族の風景 ‘２００５’

☆海外体験者が感じたこと☆

主催　フレンズ　帰国生　母の会
後援　東京海上日動火災保険株式会社
日時　2005 年 11 月 16 日（水）
　　午後 1 時 30 分～４時
場所　東京海上日動火災保険株式会社
　　新館 15 階　中会議室

プログラム

１：３０　開　会　　挨拶　　フレンズ　帰国生　母の会　　代表　河村　京子

東京海上日動火災保険株式会社
企業営業開発部　支援グループ　　グループリーダー　松田　誠太

１：４０　パネルディスカッション

パネリスト	高瀬　恵実	大学４年生
	中嶋　友彦	大学４年生
	西巻　慶一	大学４年生
	高橋　英男	会社員
	西谷　美波	主婦
コーディネーター	伊藤　洋子	フレンズ　帰国生　母の会　副代表
司　会	石山 由美子	フレンズ　帰国生　母の会　スタッフ

（敬称略）

３：１５　休　憩　・　質問用紙回収

３：２５　総括討論　質疑応答

３：５５　閉会

プロフィール

パネリスト

高瀬　恵実　大学４年生（教育学部）　父・母・妹

小学校	日本	千葉　公立校　　北海道　公立校	（小１～小２）
	タイ	バンコク日本人学校	（小３～３ヶ月）
		バンコクインターナショナルスクール	（小３～小６）
中学校	日本	東京　国立校	
高　校	日本	東京　私立校	（高１～高２）
	オーストラリア	メルボルン　現地私立校	（高２～高３）
	ニュージーランド	オークランド　現地私立校	（高３）

中嶋　友彦　大学４年生（国際総合学専攻）　父・母・兄

小学校	日本	滋賀　公立校	（小１～小４）
	アメリカ	ワシントン　現地公立校	（小４～小６）
中学校	アメリカ	ワシントン　現地公立校	
高　校	アメリカ	ワシントン　現地公立校	（高１～高２）
		ジョージア　現地公立校	（高２～高３）

西巻　慶一　大学４年生（教育学専攻）　父・母・妹・弟

小学校	日本	千葉　公立校	（小１～小２）
	ドイツ	デュッセルドルフ日本人学校	（小３～小６）
中学校	ドイツ	デュッセルドルフ日本人学校	
高　校	オランダ	アムステルダムインターナショナルスクール	

高橋　英男　会社員　妻・子２人

1996 年から４年半、家族と共にイギリス・ロンドンに駐在。
長男　中学校２年～高校３年　現地私立中学高等学校　日本の大学に進学・卒業
長女　小学校４年～ロンドン日本人学校　小学校５年～中学校２年現地校
中学校２年～日本の中学校に転入　日本の高校・大学に進学

西谷　美波　主婦　夫・子３人

1993 年から３年間、夫の赴任に伴い家族でマレーシア・クアラルンプールに在住。
長女　小学校５年～中学校２年　クアラルンプール日本人学校
神奈川　公立中学校(中２～中３)　東京　私立高校　私立大学
次女　小学校３年～小学校６年　クアラルンプール日本人学校
神奈川　公立小学校(小６)　東京私立中学高等学校　私立大学
長男　小学校１年～小学校４年　クアラルンプール日本人学校
神奈川　公立小学校(小４～小６)　東京私立中学高等学校

コーディネーター

伊藤　洋子　フレンズ　帰国生　母の会　副代表

1994 年から６年間、夫・２人の子どもと共にアメリカ・ニューヨークに在住

開会の挨拶

フレンズ 帰国生 母の会
代表　　河村　京子

本日は、お忙しい中ご出席いただきまして誠にありがとうございます。
この度は、1987 年より私どもの活動にご理解とご支援をいただいております東京海上日動火災保険株式会社様のご後援により、２年振りに第 12 回シンポジウム「家族の風景‘2005’」を開催することになりました。

私どもは 1983 年に、海外駐在経験のある母親たちにより設立いたしましたボランティア団体です。
赴任前・赴任中・帰国後の教育・生活等のご相談の他、様々な活動を行いまして、お蔭様で今年 23 年目を迎えております。

皆様よりご好評をいただいております「学校案内」も 2006 年度版にて 22 版目となりました。
私どもがここまで活動を続けてこられましたのは、東京海上日動様をはじめ、賛助会員企業、そして多くの皆様方のご支援の賜物と、スタッフ一同心より感謝申し上げております。

本日は「家族」について海外滞在経験者のパネリストの方々から貴重な体験のお話をしていただき、皆様方に何らかのヒントになればと思っております。また、後半には皆様からのご質問にお答えいただく時間も設けております。パネリストの方々からのお話を私どもも楽しみにしております。

今後とも引き続き皆様よりのご指導、ご鞭撻を賜りますよう宜しくお願い申し上げます。
簡単ではございますが開会のご挨拶とさせていただきます。

来賓挨拶

東京海上日動火災保険株式会社
企業営業開発部　支援グループ
グループリーダー　松田誠太

東京海上日動　企業営業開発部の松田と申します。
本日はこのような会にお招きいただき、私ども大変光栄に存じます。

フレンズさんと私どもの出会いは、さかのぼること約 20 年前になります。
現在弊社の常務取締役であります濱が、現在私が属している部にいた際に新宿御苑沿いにある代々木のワンルームマンションにあったフレンズさんを訪ねたことからお付き合いが始まりました。
「どうしてフレンズさんと弊社が？」という点ですが、比較的企業並びに企業にお勤めされる社員の方々の保険関係に強い弊社が、海外転勤の社命を受けた社員の方やそのご家族の方々が海外に出られる際のお悩みを解決できることはないだろうかと種々検討した結果、フレンズさんのお力をお借りしようとしたことがキッカケとなり現在に至っております。

このようにフレンズさんとの交流は長きにわたりますが、私どものフレンズさんの印象は、常に海外で生活される方々の立場に立ち、本当に役に立つ情報提供や支援を行っておられ、正に「社会貢献活動」を実践されておられると感じています。

さて、本日のシンポジウムでは「家族の風景‘2005’海外体験者が感じたこと」をテーマとされておられます。今回のパネラーの方はご父兄の海外転勤にご家族の皆様で海外に出られたということかと思います。私自身のことではありますが、私は中３のときに父の海外転勤に伴い私を除いた両親・兄弟全員がアメリカ・ニューヨークに渡りました。私は単身日本に残って、約５年間、家族と離れ一人で過ごしました。自身を振り返ると、本当の意味での親からの自立はこの期間にあったと思うのですが皆さんはいかがでしたでしょうか。本日の皆さんのお顔、また前回のシンポジウム記録からも、親元にいながら子供は自立し、また海外での生活経験が家族の絆にも繋がっているというのが実感として伝わってきます。

私も日本での一人の生活に苦労しました。皆さんも海外での生活に苦労されたことでしょう。私自身、家族間のコミュニケーションのあり方を皆さんのご経験から考え、どのようにはぐくんでいくべきかを、本日、セミナーを拝聴させていただく中で考えたいと思っています。
最後にこのようなシンポジウムを含めフレンズさんが今後も活発な活動を継続されることを祈念いたしまして、私からの挨拶とさせていただきます。ありがとうございます。

パネルディスカッション

第１部

司会　　皆様、こんにちは。ただ今、紹介いただきました「フレンズ　帰国生　母の会」の伊藤でございます。本日、コーディネーター役を務めさせていただきますが、限られた時間の中で、スムーズな進行ができるかどうか少々不安ではございますが、一生懸命務めさせていただきますのでよろしくお願い申し上げます。今回フレンズが「家族の風景“2005”」というテーマを選びました背景には、最近新聞・雑誌などで社会の最小単位である家族のことを見直す機運が高まっていることがあげられます。その理由として、凶悪犯罪の低年齢化や、以前は中学・高校が中心でした校内暴力事件が最近では小学校で多発していることが報じられています。そういった切れやすい子供が増えている原因には、日本の家族における少子化、核家族の中で人間関係の絶対量の不足が指摘されています。また、テレビゲーム、ファミコン、パソコンなどによるこどもの一人遊びの影響が大きいとも言われています。女子高生のプチ家出とか援助交際といった言葉は、フレンズが設立された頃には聞かれない言葉でした。こういった事件や社会現象の中で、私たちは家族の中のコミュニケーションがもう少しあったら防げた、起きなかった事件があったのではないかと思っています。

このように日本で「家族の力」というものが問われている中、海外赴任に伴い異文化の中に放り込まれた家族がいろいろな問題をどのようにして乗り越えて来られたのか、帰国後、家族の形がどのように変わったのか、といった話をうかがう中で、何か「日本の家族」を見つめ直すきっかけやヒントがあればとフレンズは考えています。

今回のシンポジウムに先立ちまして、今年の４月から９月にかけて、海外体験者に「家族について」のアンケートをお願いしました。帰国生 225 名、保護者 197 名から回答をお寄せいただきました。その結果はお手元の資料に一部掲載しています。シンポジウムのなかで随時紹介できればと考えております。

＊　参考資料として「帰国生および保護者の事前アンケート結果」から本文中に
帰国生のアンケート　（帰　Ⅰ－１、Ⅱ－２・・・・）
保護者のアンケート　（保　１・・・・）　と記載

シンポジウムは、最初に「海外での自分の家族のこと、他の日本人家族のことをどう思われたか」「帰国後自分の家族はどのように変わったか」　最後に「海外生活体験者としてのメッセージ」をいただく、という流れにしていきたいと思います。

≪　海外で家族のことをどう思ったか　≫

第一部では、「海外で家族のことをどう思われたか」ということを話していただきます。夫の海外赴任に伴い帯同された家族は、赴任国やその時点での家族の状況によって多少異なりますが、生活や教育面でさまざまな困難や壁にぶつかります。特に教育面では、英語圏か非英語圏か、子どもの年齢によっ

ても違いますが、それぞれの家族が滞在年数も考えながら子どもたちの学校選択に頭を悩ませます。最初に、パネリストの方の自己紹介代わりに、一人ずつ現地での学校選択についてうかがいたいと思います。自分が、または子どもが入った学校は誰の選択だったのか、高校を選択するとき日本の学校を受験することも選択肢に入れたのかについてお話をお聞きしたいと思います。

― 渡航後の学校選択 ―

高瀬さんの場合はいかがだったでしょうか。小学校３年生の時に、タイのバンコクに行かれました。３ケ月間バンコク日本人学校にいらした後、インターナショナルスクールに移られましたが、その選択はどなたがなさったのでしょうか。

高瀬　タイに行った時は小学校３年生と小さかったし、親がせっかく海外に住むのだから英語を習わせた方がいいだろうということで、インターナショナルスクールが始まるまで３ヶ月間日本人学校に行って、６月からインターナショナルスクールに通い始めました。私は、親が言うのならまあ行ってみようかなと、軽い気持ちで行くことに決めました。

司会　４年間過ごされて日本の中学に入学されたのですね。

高瀬　はい。

司会　高校２年生の１学期に転勤でオーストラリアの現地校、その後ニュージーランドの現地校に通われましたね。

高瀬　はい、そうです。

司会　高２の１学期まで日本の高校にいらしてそのまま日本に残らずに、オーストラリアの高校を選択されたのはどうしてですか。

高瀬　私は父の転勤の話を聞いた時、一人で日本に残って当時通っていた女子高にそのまま通いたいと親に言ったのですが、我が家には父の転勤には必ず家族全員でついていくという方針があり、親が許してくれなかったので、泣く泣くオーストラリアに行く決心をしました。

司会　家族の方針に従われたということですが、今考えるとその決心はご自分にとって良かったと思われますか。

高瀬　今となっては、選択は正しかったと思います。

司会　ありがとうございます。中嶋君にお聞きしたいのですが。４年生でアメリカ・ワシントン州モーゼスレイクの現地校に入られましたね。それはどなたの選択だったのでしょうか。

中嶋　モーゼスレイクは日本人の数が少なくて現地校しか選択がなかったのです。

司会　そのままずっと中学も高校も現地校ですが、中学卒業後日本の高校を受験されたと聞いていますが。

中嶋　はい。日本の高校を受験して合格したのですが、両親と話し合った結果もう少しアメリカでいろいろなことを学びたいと思い、アメリカに残ることにしました。

司会　日本の高校に行かずにアメリカの現地の高校に行かれたという選択についてどう思いますか。良かったと思いますか。

中嶋　後悔は決してしていないですが、日本の大学の友だちと話をしている時、日本の高校の学園祭とか体育祭などに参加してみたかったなと思う気持ちはあります。しかし、現地の高校生活は充実していましたし、いい友人もできたのでアメリカに残って良かったと思っています。

司会　そうですか。同じアメリカでもワシントン州とジョージア州の２つの高校に通われたわけですが、２つの高校で雰囲気が違うということはありましたか。

中嶋　アクセントと人種の比率が全然違いました。ワシントン州は白人、黒人、メキシコ人あとはロシア人、日本人、韓国人もいたのですが、南部は白人、黒人中心で私が通っていた高校の日本人は私一人でした。

司会　ありがとうございます。西巻さんにお聞きしたいのですが。西巻君は小学校３年生の時ドイツのデュッセルドルフに行かれて、日本人学校に入られましたがそれはどなたの選択でしたか。

西巻　自分の選択です。

司会　そうですか。親御さんにはどうしたいのかは聞かれたのでしょうか。

西巻　日本人学校に通うか他の学校にするのか聞かれたと思うのですが、当時は新しい環境に入るということに慣れていなかったため、それまでの学校の環境に近い日本人学校を選択したと思います。

司会　３歳下の妹さんはインターナショナルスクールを選択されましたね。同じ家族の中に違う学校に行く兄弟がいることに、違和感はありませんでしたか。

西巻　違和感というか、刺激は受けました。年下なのに、妹の方が英語をしゃべることができる。すごいなと思っていました。

司会　そうですか。　高校はオランダ・アムステルダムのインターナショナルスクールに通われましたね。日本の高校に入ろうというお考えはなかったのですか。

西巻　多分、親からどうするか聞かれたと思うのですが、妹がインターナショナルスクールで楽しそうに生活しているのを見て自分も英語で勉強したい、今までとは違う環境に行きたいと考えてインターナショナルスクールを選択したと思います。

司会　ありがとうございます。高橋さんにおうかがいしたいのですが。イギリス・ロンドンに 1996 年から４年半赴任されていらっしゃいましたが、お子さんの学校選択についてはどのようにお考えでしたか。

高橋　私は仕事柄海外出張が多かったのですが、家族は海外経験が全くありませんでした。まずは、海外の生活に慣れることができるかという不安がありました。そこで当初はまず日本人学校にと考えておりました。

司会　ご長女が日本人学校を１年終了された後、現地校へ移られましたがどなたのお考えでしたか。

高橋　ある日突然、娘が言ってきましてびっくりした、というのが正直なところです。

司会　ありがとうございました。今度は西谷さんお願いいたします。西谷さんは 1993 年から３年間マレーシア・クアラルンプールに滞在され、お子さん３人は日本人学校ですね。このとき、インター校に入れるということを考えられたことはありましたか。

西谷　日本人学校がある地域は、日本人学校へ行くようにという会社の方針がありました。子供が１年・３年・５年生でしたので、何の疑問も持たずに日本人学校にいたしました。
当時、クアラルンプールには大変多くの日本人が住んでいまして、日本人学校は 1000 人を超す規模だったと思います。

―　子供の学習と親の関わり　―

司会　ありがとうございました。
次に、225 名のアンケートの中で、「海外生活の中でお父さん、お母さんがしてくれたこと、一緒にしてよかったことは何ですか」（帰Ｉ－４）の質問に帰国生たちの多くが、「一緒に旅行したこと」「外食やショッピング」「映画」「観劇」「音楽会やスポーツ観戦」「話を聞いてくれた」ことなどを挙げています。また宿題を手伝ってくれたことに〇を付けてくれた帰国生もたくさんいました。また、保護者 197 名のアンケートの中で「海外生活の中で家族またはお子さんのために心がけたことは何ですか」の質問

に「一緒に旅行へ行ったこと」「外食や買い物」「子どもの話を聞いたこと」「子どもが困ったときに相談にのったこと」に加えて多くの保護者が「子どもの宿題を手伝ったこと」を挙げています。（保 5）パネリストの皆様に現地で子どもたちの生活や学習に親はどう関わってきたかをうかがっていきたいと思います。高瀬さんはいかがでしたでしょうか。

高瀬　私はタイでは塾や家庭教師を使ってはいなかったので、夜遅くまで母が宿題を手伝ってくれました。週末は家族で近場にドライブをしたり、長期休暇には近くの島、プーケットやパタヤなどに旅行したりしていました。

司会　オーストラリアやニュージーランドでの勉強などはどうでしたか。

高瀬　高校生になりますと、もう自分の力でやるしかないということで、自力でやっていました。

司会　確かに高瀬さんからいただいたアンケートの「宿題を手伝ってくれた」という項目にはお父さん、お母さんには〇が付いていませんでしたのでご自分の力でされたのかなと想像していました。
中嶋君はいかがでしたか。

中嶋　渡米した当時は、英語が全然分からなかったので父親と母親に聞いたり、家庭教師にも頼んで週４回程度、授業や宿題を手伝ってもらっていました。週末は、父親は仕事が忙しくほとんど家庭に居ないので、母や兄と出かけたりしていました。

司会　中嶋君のアンケートでは、「宿題を手伝ってくれた」人として、お父さんに〇が付いていますが。

中嶋　母には、〇は付けませんでしたが少しだけ手伝ってくれました。

司会　４年生から現地校でしたが、いつ頃から自分で宿題をこなせるようになりましたか。

中嶋　小学 6 年生位から親の手助けは特に必要にならなくなりました。家庭教師の方に週 1 回程難しいところを手伝ってもらいました。

司会　西巻君はオランダのインター校での宿題はいかがでしたか。

西巻　初めて英語での勉強でしたので両親に聞いたりしたことはありましたが、高校生という年齢でもありましたし、自分でキチンとやらなければという自覚もありましたので、自分でやるということで親の手助けをはね除けてしまいました。

司会　「宿題を手伝ってくれた」の項目でお父さんに〇が付いていましたが、結構お父さんに手伝っていただいたのですか。

西巻　最初は本を読むことさえ難しかったので、教科書とか読み物を読んでもらったりしました。直ぐにはエッセイや課題が出されて自分の意見を書いたりする力が無かったので、そういう意味では手伝ってもらいました。

司会　インター校では勉強以外に友達関係でも苦労したとおっしゃっていましたが、どんなことで苦労されましたか。

西巻　やはり言葉が出来ないことと、当時は新しい環境に溶け込めなかったので外国人の友達がなかなかできなかった、ということです。

司会　ありがとうございました。
高橋さんはいかがでしたか。

高橋　先ほど申し上げましたとおり、小学校 5 年生で娘が突然現地校に行くと言い出し、その時はびっくりしましたが、本人はやる気ですので止める必要は無いなという事で、「えい、やあ」で飛び込みました。英語を一切知らずに飛び込んだ訳です。ミッション系の学校でしたので宗教学とか倫理社会とか、宗教の知識が無ければ分からない宿題が多くて、そういう意味では私も毎日勉強をさせていただきました。

司会　お嬢さんの宿題に毎晩付き合われたのですね。

高橋　会社から帰ってきますと娘が待っておりまして、初めの頃は様子が分からず「早く寝たら」と申しますと、もじもじと宿題を持ってきまして、それに気が付いて以来付き合いを始めた次第です。

司会　お嬢さんのアンケートの「宿題を手伝ってくれた」の項目の父親にしっかりと〇が付いています。また、ご自分の転勤で異文化にお子さんや家族を投げ込んでしまったという事に罪悪感などはありましたか。

高橋　もちろん、ありましたね。自分の仕事に家族を帯同したという思いが強くあったと思います。

司会　ありがとうございます。
西谷さんのご家庭はいかがでしたか。

西谷　私の場合は日本人学校でしたので、教育面・学習面では特に心配は無かったのですが、途中次女がインター校に非常に興味を持った時期がありました。たまたまその学校を訪ねていく機会があり、先生とお会いしてお話をすることができました。その当時、日本人がとても多くて少々困られている状況でした。「この先ずっと英語で勉強するのであったらいらっしゃい。そうでなければよく考えなさい」と言われ、そうこうしているうちに帰国が決まりました。クアラルンプールでは親子で３年間めいっぱい遊んできたと思います。マレーシアは多民族国家で宗教も言葉も多様な人々が一つの国を作っているという所で、いろいろな事に興味を持ちました。旅行や週末にナイトマーケットなどを訪れ、とにかくよく遊んだと思っています。

司会　西谷さんのアンケートの中で、「海外生活中お子様に心がけられたこと」の項目で「学校にボランティアに行った」とありますが、どういったボランティアでしたか。

西谷　マレーシアでは「Look East」という日本や韓国を見習って行こうという大きな動きがありました。交流の一つの場として日本人が催す盆踊り大会は大変大きなもので数万単位の人が集まり、マラヤ大学の学生達やいろいろな人達が参加するものです。主人の会社も参加しますが日本人学校も踊り手を出し、私達 PTA もカセットを持参し、いくつかのコンドミニアムへ踊りを教えに行ったりしたこともありました。

―　父親・母親としての存在の変化　―

司会　ありがとうございました。
日本では一部の小学生が定期券と携帯電話を持って電車通学などをしていますが、海外では　　どうしても通学はスクールバスを使う所もあります。友達の家へ遊びに行くにも親の送迎が必要となり、子どもが一人で行動できない環境に置かれます。そういった中で子どもの好むと好まざるに関係なく親のサポートが必要となってくるわけです。次に、日本在住時と比べて父親、母親の存在はどのように変わったかうかがっていきたいと思います。どなたかお話いただけますか。
はい、中嶋君どうぞ。

中嶋　日本に小学校４年生まで住んでいました。その頃、父親の姿を殆ど見ることが無く、夜中の１時２時位に帰宅していたみたいです。アメリカでも最初の３～４年間はあまり変わらず、その後仕事が少し楽になり、また日本人の赴任者も増えてきたので、仕事の量が減り少しずつですが姿だけは確認できたという状態でした。

司会　父親の姿を発見できたということですね。
他の方はいかがですか。西巻君のアンケートに「海外生活で父・母がしてくれたこと、一緒にして良かったこと」の項目で「親も一緒に成長してくれた」と書いてありますが、説明いただけますか。

西巻　なかなか説明が難しいです。感覚で感じたことなのですが、年齢とともに変わる自分の成長に合わせて

親が対応してくれたということです。親は自分を見守ってくれたと感じています。

司会　ありがとうございます。

高橋さんの海外生活は「アッシーとガイドと通訳だった」とおっしゃっていましたが、そういうところで自分が少し頼られていると実感なさったのではありませんか。

高橋　はい。必要不可欠な存在だったと思っています。初めの頃はどこに行くにも私が居ないと車を動かせませんでしたし、買い物一つにしても交渉係もしましたし、夜、ご飯を食べに行くというと必ず予約を入れておりました。そういう意味で当初は必要不可欠な存在であったかと思います。

西巻さんがおっしゃっていたように、子どもや家内が慣れてくるといつの間にか車で出かけたり、いつの間にか市内に遊びに行ったりできるようになりました。それはそれで一人ひとりが成長し、一人で動けるようになったと喜んでおりました。

― 海外生活における父親の存在 ―

司会　ありがとうございます。帰国生のアンケートの中で、「海外生活でお父さん、お母さんがしてくれた事、一緒にして良かった事は何ですか」の回答で「旅行、買い物、送迎、宿題を見てくれた」以外に「友達が家に来た時にもてなしてくれた」「友達の家族と仲良くしてくれた」にたくさんの帰国生が、母親と共に父親にも〇をつけています。（帰 Ⅰ－４）

日本では、ここまでやってくれるようないいお父さんは珍しいかもしれません。また、「話を聞いてくれた」、「世の中のいろいろな事を教えてくれた」、においても、多くの帰国生が父親に〇をつけています。自分の海外赴任に伴って家族を巻き込んでいる事への罪滅ぼしなのか、責任感なのか、海外滞在中の父親の出番や存在が非常に大きくなっていった事は確かなようです。やはり海外での家族の風景を考える時、海外生活によって突然クローズアップされた父親の存在というものを無視するわけにはいかないようです。

それでは次に、現地での外国人の家族における父親の存在と、自分の父親、夫との違いをどう感じたか、また現地の人々に日本人である自分の父親のことを聞かれたことがあったかどうか

うかがってまいりたいと思います。高瀬さん、いかがですか。

高瀬　私の父親は、多分典型的な日本人の父親とは少し違っていると思います。それは、海外に行く前からだったかもしれないのですが、すごく家族と仲が良くて、子供たちとも冗談を言い合って皆で笑っているような家庭だったので、むしろ外国に行った時の方が、外国人の父親と私の父親の存在が近いのではないかなあというふうに感じました。

司会　では、高瀬さんのところのお父さんはこうだけれど、普通のいわゆるお父さんはどうなの、というふうに聞かれたことはありますか。

高瀬　高校の時にジャパニーズの授業を取っていまして、その時にその授業を一緒に取っている友達は、日本にすごく関心のある人だったのです。日本の家族について勉強した時がありまして、日本の父親というのは、さっき中嶋君が言っていたように、帰りが遅くて子どもと会う機会が少なかったりするということを習ったので、「恵実の家もやっぱりそうなの」というふうに聞かれて、日本にいた時に比べたら海外にいた時の方が一緒に過ごす時間が多かったので、「そうだね、日本ではそういう傾向が強いかもしれないね。」というふうに話した記憶はあります。

司会　そうですか。中嶋君はいかがですか。

中嶋　高瀬さんのお父さんとは正反対に、典型的な日本人の父親なのかなあと思います。やはり仕事の方が忙

しくて、あまり家にもいず、家庭内での問題は、すべて母親が父親に相談したり、解決したりしていました。アメリカで仲良くしていた友達のお父さんは一緒に遊びにも行くし、大体皆家にいて夕食を食べる時も皆一緒に食べていました。父親の存在感がすごくありました。遊びに行くと父親がいるなっていう感じがしました。

司会　うちの場合は、父親がいないなあと思われたということですか。

中嶋　そういうことではなくて、仕事が忙しいのは仕方がないですが、もう少し家庭に目を向けて欲しかったなという気持ちが今はあります。

司会　ありがとうございました。西巻君はいかがですか。

西巻　自分の父親の場合は、日本にいた頃から結構自分が連れてくる友達にとてもオープンでしたし、家族の中でも仲良くしていたというのは変ですけれども、楽しくやっている感じでした。また、海外に行ってからは家にいる時間が増えまして、小さい頃は一緒に遊んでもらったり、大きくなってからも友達を連れてきた時などフランクに対応してくれました。

司会　ありがとうございました。高橋さんの場合は、父親として、夫としての立場でいらしたわけですが、何かイギリス人に学ばれることはありましたか。

高橋　想定外の質問を急にあてられて、今困っているのですが、職場でちょっとしたトラブルが起こった時に、イギリス人同僚の男性が、「どうしてもその日は都合が悪い。前々から家族と約束していたことがあるので、その日は仕事には行けない。」と言われたことがありました。私自身はその時非常に頭に来まして、「もう、いいよ」と、ガチャンと電話を切った覚えがあります。

後々考えますと、やはりそういうところが普段から言われている、いろんな意味での違いということなのだと思います。仕事の非常に大きなトラブルの中で、自分自身が現地の人からそういう対応を取られると、いいとか悪いとかではなくて、文化の違う所なんだなと実感した覚えがあります。

司会　ありがとうございます。西谷さんの場合はいかがですか。

西谷　日本にいる間はやはり仕事で帰りが遅くなり、夕食を共にするということがほとんどありませんでした。学校や幼稚園などの集まりも平日の日中にあったりするので、父親の参加はほとんど想定されていないのかもしれませんが、参加の場がほとんどなかったことは気の毒な気がしました。海外に行きまして、同じ時間を多く共有することができて、初めて父親というものを子供たちが身近に感じたと思います。そしてたまたま、コンドミニアムという集合住宅に住むことになったのですが、そこには、ヨーロッパ、アメリカなど各国から転勤された方がみえていました。外国のお父さんたちがお休みの時に、あるいは会社から早く帰ってきますと、下にあるプールで、小さい子供たちとしょっちゅう一緒に遊んでいる姿を見かけたので、父親と子どもの関わりがたくさんあるなと感じました。

司会　ありがとうございます。

高橋　すみません。1つだけ追加させてください。現地校では必ず学期末に成績のフィードバックがありましたが、学校訪問の設定時間が夜7時などの時間でした。私も行きましたが、大体のご家庭が夫婦でお子さんの成績をもらい、また先生といろいろとディスカッションをされていました。日本でしたら多分個室でされるのではないかと思うのですが、大きな教室のオープンスペースで先生がいらっしゃって順番にまわっていくのです。そういうのを見て、やはり違うんだなというのと同時に、父親もそういう責任をもって来ているのだなというのを感じました。

司会　子育てというか教育において、責任は父も母も両方同じということですね。

それではここで再び、帰国生のアンケートの結果を紹介したいと思います。

「あなたの家庭と外国人の家庭を比較した時、家族の関わり方に何か違いがあると思いましたか」とい

う質問に対して、約 10%の帰国生が「外国人の家庭は仲が良く、互いの関わりが多い」と答えています。（帰 Ｉ－６）具体的には、「子どもの前でも両親の仲がよい」、「祖父母、親戚とよく食事をする」、「会話が多い」などと書いていました。また、同じく 10%の帰国生が「日本の家庭と外国人の家庭に違いはない、家族を思う気持ちは一緒」と答えています。回答の中で目を引きましたのが、5%の帰国生が「父親の関わり方が違う」と答えていることです。具体的には「外国人の家庭は父親が早く帰宅し、食事を一緒にとる」、「父と母の役割分担があまりなく、父も家事をする、父親が子育てや学校行事によく参加している」と書いていました。こういったことが、今高橋さんがおっしゃったように、PTA 活動にも必ず夫婦単位が原則であるといったことにも表れていると思います。

さてここで、現地において、父親の仕事を家族、子どもたちが見る機会やその職場を身近に感じることはあったかどうかについてうかがっていきたいと思います。高瀬さんの場合はいかがだったでしょうか。

― 父親の職場を身近に感じたか ―

高瀬　私がオーストラリアの学校に行っていた時に work experience というプログラムがありました。それは、１週間、生徒が興味のある仕事場で働いてみるというものでした。例えば、弁護士になりたいなあと思う人は法律事務所で１週間働かせてもらうというわけで、私は転校してきたばかりだったので、どの仕事がいいかと選ぶ時間がありませんでした。それで、父親の会社でお世話になることになりました。父と一緒に通勤して父の同僚や上司にも紹介してもらいましたし、かなり職場を身近に感じることができました。

司会　work experience は、高校１年生の時に１週間行われるのですね。

高瀬　そうです。

司会　それは生徒がそれぞればらばらに１週間とるわけですか。それとも１週間という期間が決まっているのですか。

高瀬　はい、決まった１週間です。

司会　ではその間は、会社や役所やお店も全面的にそれに協力するのですね。

高瀬　そうですね。

司会　例えば今、法律事務所とおっしゃいましたけれど、他に人気のある仕事はどういうものがありましたか。

高瀬　レコード会社とかでしたね。１週間のプログラムが終わった最後には好きなＣＤをもらえたりしましたし、お給料も結構良かったと聞いています。

司会　オーストラリアの高校では、まず職業適性検査があるとうかがっていますが、職業選択教育が結構充実しているのにはどういう背景があるのでしょうか。

高瀬　日本に比べて大学進学率がそれ程高くなくて、高校を卒業してからすぐ就職するという人が多かったので、そういう意味でも学校がバックアップしていかなくてはいけないのです。

司会　ありがとうございます。では次に、中嶋君のお父さんは非常に忙しくて、ほとんど姿かたちが見えないとおっしゃっていました。お父さんのお仕事、職場を身近に感じることはありましたでしょうか。

中嶋　特にはなかったですね。工場とかにも行ったことはなくて、父親が家に仕事をいろいろ持ち帰ってきたという記憶はあったのですが、それ以外に見る機会、接する機会はなかったですね。

司会　一体、父は仕事で何をやっているのだろうと疑問に思われたことありましたか。

中嶋　あったんですけど、仕事はエンジニアだとしかわからなくて・・・。

司会　ありがとうございました。西巻君のお宅はどうでしたか。

西巻　はい、父の仕事や職場を見る機会は、ひとつは小さい時に、家族で食事に行く前に父がちょっと用事があってオフィスに寄る時について行って、中に入らせてもらったりしたことはありました。あと、高校に入ってからは、学校の宿題でよく印刷するものがあったりすると、父の会社はコピーを扱っているので、会社に行きコピーをさせてもらったりしました。まじめな宿題でいえば、ＩＴの宿題で会社のセキュリティーシステムがどうなっているかを聞いてこいと言われたので、父親を通して調べたりしました。あと、自分が一番今でもよく覚えているのは、多分中３の時ドイツにいたのですが、ハノーバーで電子機器とか情報機器とかのメッセがありました。桁外れの大きな見本市会場だったのです。そこに友達と 2 人で連れて行ってもらって、初めて自分の父親の会社のブースに父親がいるところを見て、「ああ、海外で仕事をするってこういうことなんだ」と目と体で感じたのはすごく強烈でしたね。

司会　ありがとうございました。高橋さんのお宅はいかがでしたか。

―　職業教育　―

高橋　はい。イギリスの場合は、年に一回、girls’day というのがありまして、自分の娘が会社に来て父親の職場を見るといったようなことがシステムとしてありました。なんで girls’day で boys’day はないのかなと思っていたんですけれども。娘は残念ながらその日はちょっと都合が悪くて来ることができませんでしたので、西巻さんではないですけれども、別途休日出勤のときに娘を連れて行ってコピーを取ってもらうなどの仕事の手伝いを、バイト料も払わずに働いてもらったということはありました。

司会　お嬢さんは喜んでいましたか。

高橋　ええ、まあこういうところで仕事をしているんだねっていう、雰囲気だけでも見られたということで。まだ小さかったので、その時は素直に喜んでくれました。

司会　西谷さんのお宅はいかがでしたか。

西谷　そうですね。主人の会社というか、周りの人たちを身近に感じたというでき事は、引っ越して間もなく、二年に一度行なわれる会社の親睦旅行がありまして、私たち家族も参加しました。現地のスタッフの方から、ドライバーさんまで、みんなが家族を連れてきてバス 6 台くらいで大移動する旅行だったんですね。本当に皆さんがすごく楽しみにしていまして、一緒に来た子どもたちが素敵な服を着ているのに、日本人の私たちの子どもは、ビーチサンダルにＴシャツっていうような格好で、行ってしまったんです。ビンゴ大会とか演芸大会とかを、社員みんなが一緒になって、家族を楽しませてくれました。普段、夫が、あるいは父親が、仮装をして舞台に立つ姿を見たことがありませんでしたが、そういう和やかな姿を目の前にして、こういう皆さんに支えられて一緒に仕事をしているのだなということを身近に感じた旅行でした。

司会　はい、ありがとうございます。私はアメリカのニューヨークに 6 年ほど滞在していた経験がありますが、ニューヨークの現地の小学校にも girls’day というものがありました。やはり、男女平等のアメリカですからガールズだけではなくボーイズもありまして、この日はしっかり父親や母親の職場を見に行く日となっていました。また、オーストラリアの work experience に匹敵する授業が、ニューヨークのパブリックハイスクール（公立学校）にもありまして、高校を卒業する直前に、シニアオプションという 2 ヶ月間社会参加だけをする時間が設けられていました。学校には一切通わず、自分が興味を持っていた、将来やってみたい職業にチャレンジするのです。それは、お店であったり、会社であったり、学校施設であったりしますが、自分の適性や新しい興味の発見、将来の職業選択をする意味で、大変有意義な時間であったと、生徒たちは口々に言っていました。日本でも大学卒業後、自分の進路が見つけられず、

ニートやフリーターになる学生の増加が社会現象化していますが、これは日本の社会全体の問題というだけではなく、これから大人になる子どもを持つ親たちにも、大変な不安の種となっているようです。今お話に出ました、オーストラリアの work experience やニューヨークのシニアオプションのように、日本でもニート対策として、中学・高校で職業教育を導入する学校が増えていると聞いています。また、企業側も、欧米では一般化していました就職前に企業で働いてみるというインターンシップ―就業体験―を受け入れる会社も年々増えてきているようで、日本のこれからの職業教育が注目されると思います。

それでは、このように異文化に向き合われた家族が「帰国後どのように変わられたか」について、第二部でうかがっていきたいと思います。帰国後の学校選択、パネリストの大学生の皆さまにとっては、大学および学部決定は誰の選択だったか。そして、そのことに対してご家族はどうかかわったかについてうかがってまいりたいと思います。高瀬さんの場合はいかがでしたか。

第２部

≪　帰国後自分の家族はどのように変わったか　≫

―　帰国後の学校選択　―

高瀬　はい。私はもともと高校生の頃から心理学に大変興味を持っていたので、大学では心理学を専攻しようと決めていました。いつも父親の転勤に振り回されてばかりいたので、大学くらいは自分の思い通りにしたいなというところがありまして、日本の大学を受験したいということを両親に話しました。でも、両親は私に一人暮らしをさせるのが不安だったので、ニュージーランドの大学にそのまま行くということを勧めてきました。でも、私はあきらめずにどうしても日本の大学に行きたいんだと訴えましたら、じゃあ二つだけ大学を受験して、そこに受かれば行ってもいいよということでした。まさか受かりっこないと思っていたんですが、第一希望の大学に合格できたので、今はその日本の大学に行っております。

司会　ニュージーランドの大学に進学しなかった選択に対して、今でも満足していますか。

高瀬　はい。

司会　そうですか。はい、ありがとうございます。中嶋君の場合はいかがでしたか。

中嶋　高校にいた時は、獣医学か国際関係学のどちらかを将来勉強しようかと迷っていました。母親が日本の大学をいくつか紹介してくれて、その中に自分が勉強したかった国際総合、国際関係の学部があったので、その方に進学することに決めました。

司会　どうして国際総合、国際関係の勉強をしたいと思われたのですか。

中嶋　当時はＮＧＯとか国連で働きたいという気持ちが強かったので、そちらのフィールドに興味がありました。

司会　では中嶋くんの場合は大学選択においては、わりとお母さまというか、親の影響も大きかったということですか。

中嶋　母親はあくまでも、大学を少し紹介してくれただけなので、自分でアメリカの大学に行くか、日本の大学に行くかを決めました。

司会　はい、ありがとうございます。西巻君の場合はいかがでしたか。

西巻　はい。私の場合は、ずっと日本に帰りたかったので、大学は、海外の大学に行くチャンスもあるけれど、日本の大学というふうに決めていました。それで、高２の夏に、勉強も兼ねて、日本に３～４週間帰って、その時にオープンキャンパスなどを回ってみました。その時初めて、ひとりで寮に入って生活したのですが、ひとりで動いてみて、久しぶりの日本で海外との違いというのを体験して、そのあたりから教育というものにすごく興味を持ち始めて、日本に帰りたくなり、日本の教育に興味があるということで、今の学部というか、大学を選びました。

司会　インターで何か、閉塞感というのを感じていらしたのですか。

西巻　はい。閉塞感というか、まあ息詰まった感じはしていました。それは多分自分だけじゃなかったと思いました。すごく日本人が多いインターナショナルスクールで、日本人同士どうしても固まってしまうような環境でした。固まるってことは必ずしも悪いというわけではないんですが、あまりよくない面を自分の目で見てきて、これはなにか日本独特なのかな、教育の影響なのかなっていうことを感じました。

司会　そのように日本人同士が固まっている、集団行動を取るというのは、学校教育のせいと思われましたか、

それとも家庭教育のせいと思われましたか。

西巻　それは、一概にどちらとは言えないですが、当時の自分は学校生活の、生活の仕方が違うというところに興味を持って、今も興味を持っています。もちろん、それぞれ個々の家庭の背景というのは違うと思いますが。

司会　インターでの日本人同士が固まってしまうという人間関係を見て、自分は教育を勉強したいと思われたわけですね。

西巻　はい。

司会　はい。ありがとうございます。高橋さんの場合はいかがでしたか。ご長女が中２で日本の中学に編入されましたが。

高橋　はい。長女の場合は、向こうで現地校でしたので、そこで学んだ英語が活かせるような環境、そういうところがいいなと思いました。いわゆる帰国子女受け入れ校というところを親も考えましたし、当人もそう考えておったようです。ちょうどその時に、私が勤務している会社の子女教育の先生が現地を巡回して来られましたので、本人も同席した上で相談しまして、そういう方向がいいのではないかというアドバイスもいただきまして、まあ本人も、そういう方向にしようということで最終的に決めました。

司会　帰国子女受け入れ校というお話が出ましたが、私どもフレンズでも　『母親が歩いて見た学校案内　中学・高校編』　を出版していますが、この本はご存知でしたか。

高橋　ええ、会社の担当の方からは聞いていました。

司会　ありがとうございます。西谷さんの場合はいかがでしたか。

西谷　当初、だいたい４~５年は滞在するであろうと思って、長女が高校入試にさしかかった時に、その先をどうするか考えなくては、と予想していたのですが、3 年で突然帰国ということを言われまして子どもたちは帰りたくないと泣いていました。　神奈川県にある社宅は海外から帰国した家族が集まるということで、そこに入居が決まりました。そこに引っ越したところ、すぐ近くの小学校・中学校がちょうど川崎市の国際理解教育を推進しているところでした。また、周りに社宅が多かったこともあり、帰国生が 50～60 人いるというような状態で、日本語がまだなかなかできない人たちのためには、日本語の教師もついているというところでしたので、とてもすんなりと受け入れてもらいました。次女が小学校６年生の 11 月に転入したのですが、周りが中学受験をするということで、いろんな情報が入ってきて、「西谷さんも受けてみたら」と、なんの知識もなく渦の中に入ってしまいました。とにかく情報がすごくあふれていて、どう理解したらいいのかなと迷ったところがありました。

―　帰国後のカルチャーショック　―

司会　ありがとうございます。では再び、帰国生のアンケートを紹介したいと思います。「自分の両親は自分たちの価値観を押し付けていると感じたことがありますか」（帰 Ⅱ－６）と言う質問に対して、「ある」と答えた帰国生が 20%、「ない」が 39%、「どちらともいえない」が 33%でした。

　では、「価値観の押し付けと感じたのはどういう時ですか」と聞いた質問に対しては「進路、受験時志望校選び、日本の大学に行くように言われた、いい大学・大企業に入るように言われた」

また勉強では　「英検を受けるように言われた」、友達関係では「門限、服装、行動」と書かれていました。結果から、多くの帰国生が、押し付けというより、導いてくれている、と考えているようです。「進路について押し付けを感じたことがあったが、よく話し合えてよかった」　「親は学校がすべてとは思っていないが、その話になるとうまく気持ちが伝わらない」と書いている帰国生もいました。さて、パ

ネリストの皆様は、「大学選択においては、それぞれ自分のご意思で日本の大学を選択された」　と答えていらっしゃいました。高橋さんや西谷さんのお子さんたちも、「帰国後の学校選択もスムーズにソフトランディングできた」とのお話でしたが、帰国後の日本の生活や学校において、自分または子供たちがカルチャーショックを受けることがあったかどうか、うかがっていきたいと思います。どなたかお話くださる方いらっしゃいますか。西巻君どうぞ。

西巻　最近でも若干カルチャーショックというか、違和感を覚えることはあります。特に入学時にカルチャーショックを受けたのは授業の仕方の違いでした。インターナショナルスクールでは、すごく少人数で、先生と生徒はいつでも聞いたり話したりっていう関係が成り立っていたのに対して、大学に入ってすぐは、いきなりこう、特に一年生だったということもあったのですが、百何人の生徒に先生が一方的に話すだけというので、退屈してしまいました。少人数のクラスが一個か二個あるのですが、たまたまおとなしいクラスに自分がいたせいもあったのですが、全然生徒が発言しなくて、すごくフラストレーションが溜まっていましたね。カルチャーショックということで言えば、自分はそうは思っていないのですが、「帰国生」っていうふうに言われて大学に入ります。入った後に、たまたま自分の学部では障害について勉強する機会がありました。それがきっかけで障害を持っている方と話をしたり、それに興味を持ってボランティアしたのですが、「障害者」であることと、「帰国生」であることとの間に似たような感覚を味わいました。例えば、視覚障害を持っている方とお話する時とかに、身の回りに何かあったら、自分が、こちらが何か伝えてあげないとわからないじゃないですか。その時にそういうことを常に考えながら話すというのは、まさに日本語を英語に翻訳する時の感覚とすごく似ていて、自分にとってはそれも大きなカルチャーショックでした。

司会　はい、ありがとうございました。他にカルチャーショックを感じた方いらっしゃいますか。では、高瀬さんからお願いします。

高瀬　西巻君とちょっと似ているのですが、心理学を勉強したいなあという気持ちがあり、大学を受験したのですが、実際入学して授業を受けて、大教室で先生が講議をしている時にほとんどの人が居眠りをしているか、他の事をやっているという状態でした。ただ、出席カードを提出して単位だけもらって卒業すればいいという人がすごく周りに多くて、かなりショックを受けました。

司会　はい、西谷さんいかがでしょうか。

西谷　これは、私の感じたカルチャーショックなのですが、日本に戻り、毎年春になるとＰＴＡの役員選出というのがあります。私の場合、ちょうど、小学生と中学生の子供がいまして、まず、小学校が先になりました。そちらの方は、帰国子女の子どもが多かったのですが、早く、新しい環境でいろんなことを知りたいと積極的に委員をする転校生のお母さんがほとんどでした。それで、その年は私も勉強のために役員をお受けしました。数日後、今度は中学３年生になりました娘のほうの保護者会に行きました。そこで、ＰＴＡ役員の選出の日だと皆さんご存知だったのか、全体会の後びっくりしたことに教室に３人しか来ていなかったのですね。「どうして」と思ったのですけれども、私は小学校の方で委員をお受けした後だったのでお断りしました。多分、子供のことを考えていないわけではないのですが、そのような活動を皆さん敬遠されているということにちょっとショックを受けました。

司会　ありがとうございます。中嶋君も大学で、男子生徒と女子生徒の人間関係に距離を感じたと、以前おっしゃっていました。

中嶋　はい。やはり、アメリカにいた時は、男も女も積極的だったのですが、日本に帰ってきて、男のほうが消極的というかシャイ、人間関係について、男女関係についてすごくシャイだなあと感じました。まあ、ある意味カルチャーショックでしたけれど、まあ、自分もシャイなのでなんとも言えませんが・・・

司会　はい。ありがとうございました。海外赴任を終えて帰国した家族たちは、日本の生活や学校にカルチャーショックを受けながらも日本での生活を再スタートさせるわけです。それでは、家族で過ごす時間に変化があったかどうか、親と子供のコミュニケーションに変化があったかどうかを伺っていきたいと思います。（帰 Ⅱ－１）パネリストの皆様の家庭の事情を伺う前にアンケートの結果をお知らせしたいと思います。帰国生 225 名の中で、「家族で過ごす時間が減少した」と答えた生徒は 78%にも及び、保護者 197 名のうち、85%がやはり「家族で過ごす時間が減った」と答えています。（保 ６）その理由としては、「父親が忙しい」「子供が部活や習い事で忙しい」「子供が塾に時間をとられる」「子供が友達と過ごす時間が増えた」「子供の成長とともに自然に」といった理由から「家族揃ってがなくなった」「家族単位の行動から子供たちだけでという行動になった」「父親と接する時間が少なくなった」とアンケートに記入しています。ある保護者は次のように書いていました。「家族一緒に行動することは激減した。海外では家族が力を合わせて生活している感じがした」また、「父親の仕事、職場と家族との隔たり感が海外では少なかったが帰国後は隔たり感を感じる」「子供は友達、勉強など家族で過ごす時間以外にとられてしまって、一体感を感じなくなっている」また、「日本では携帯の普及とともに、友人関係もわからないし、どこで何をしているかも把握できない。それぞれ、固有の世界を持つようになった」と記入されています。それでは、パネリストの皆様の家族の場合をうかがっていきたいと思います。帰国後、家族で過ごす時間やコミュニケーションについて何か変化はありましたでしょうか。高瀬さんのご家庭はいかがだったでしょうか。

高瀬　ものすごく変化があったと思います。まず、父の帰宅時間が遅くなりました。私と妹も大学生になり、アルバイトですとか友達との付き合いで家にいる時間が減りました。その結果、家族で過ごす時間が減りました。その代わり、家族全員が１台ずつ携帯電話を持っているので、メールでこまめに連絡を取ったりしています。父がたまに面白い写メールを送ってきたりするので、そういう意味では、コミュニケーションの方法は変わりましたが、まだ繋がっているのかなあと思います。

司会　ありがとうございます。中嶋君の場合はご両親とお兄様がまだ、アメリカにご滞在ということで、中嶋君だけが大学に入って一人暮らしということですね。

中嶋　はい。

司会　その辺のコミュニケーションはどのようにとっていらっしゃるのでしょうか。

中嶋　母親からよく電話やメールがきて「今何しているの」とか、「就職活動どうなっているの」などの問い合わせが多くて困っているんですよ。親はまだ子供離れしていないというか、自分は親離れしているつもりなのですが、向こうから頻繁に連絡があって、心配してくれているということはうれしいんですが・・・

司会　西巻君も大学に入って一人暮らしを始められたわけですね。その辺のコミュニケーションはどのように取れていますか。

西巻　実家は千葉で、自分が住んでいるのは筑波なのですごく近いのですが、高校のときは早く一人暮らしをしたいと思っていました。もちろん家族のコミュニケーションは減ったと思いますが、最近進路を考えるに当たって、自然と親を頼るようになりコミュニケーションは変化したと思います。

司会　ありがとうございます。では、アッシー、通訳、ガイドから解放された高橋さんはいかがでしょうか。

高橋　はい。帰国直後は変わらなかったんじゃないかと思います。要は、現地へ赴任したときの裏返しということです。一方、子供も毎年、歳をとるわけですし、そういう意味合いと、もう一つは、４年半向こう

にいまして、日本では日本語で友達とキャッキャッと言えることに多分帰国前、娘はあこがれというか楽しみに思っていたようです。ですから、帰ってきてから現実にできるということで学校へ行くのが楽しくて、勉強ではなく、学校で同年代の同性の友達と話ができるということを、帰ってきた当初は楽しみにしていたみたいですね。そのあたりでぐっと親から離れていったのではないかなと思います。さっき、西巻さんがおっしゃったように、大学の進学というところで、またちょっと帰ってきて社会のことを色々と聞くようになりました。そういう機会で、また違う意味で会話が増えてきたのかと思います。残念ながら、大学に入りましたら、また今度は学生生活のほうが楽しいということで、今離れていったかなといったところが現実です。

司会　西谷さんのご家族は帰国後３年半経ってご主人がまたタイ・バンコクのほうへ約４年単身赴任、現在はインドネシアのジャカルタのほうに単身赴任中ですね。また離れ離れになってしまったご家族はどのようにコミュニケーションをとっていらっしゃるのでしょうか。

西谷　日本に帰ってきて、時間の流れが急に速くなったような気がしました。しばらく５人の生活をしていたんですが、次の転勤が決まりました。タイのバンコクだったんです。それで、子供たちにも話しましたところ、真ん中の子は「私行きたい」と言ったんですが、上の子はちょうど高校３年生を迎える時、下の長男は中学受験をがんばってやっと入学ということで、どちらかというと行きたくないということだったのです。もし、これが英語圏だったらどうだったかなあと思うこともありますね。当時、社宅におりまして、いずれ出なくてはいけないので、新居を準備し、春にできるという１月に、主人は一人で新任地へ向かいました。もう約６年になり、新居が新居でなくなっているのに、まだ主人は入居していません。もっときれいに使わなくてはと思っていますが・・・こういった形で、家族が別れて主人が単身赴任となってしまったということは、我が家にとって大きな出来事でした。特に、うちは２歳ずつ離れて３人子供がいますので、毎年、卒業・入学ということが重なって、進学のこと、就職、今、長女は社会人１年生になりましたが、子供たちにとって大きな節目にぶつかってしまって、どうやって切り抜けるかということが、我が家の一番の大きな課題であり、現在進行形の問題です。今、メールという手段がありますのでそれを大いに活用しています。

― 海外体験者と非体験者における家族関係の違い ―

司会　帰国後、単身赴任家庭が結構多く、保護者からのアンケートによりますと、約１割近くが単身赴任の生活を余儀なくされているようです。日本の高校生や大学生になると父親が帰ってくるとしても、すぐアルバイトを入れたり、友達との予定を作るケースが多いと思うのですが、そんな中「ファミリーデーを作ろう！」という西谷家の雰囲気は素晴らしいと思います。

こういった家族の愛情や支えが単身赴任中の父親たちを支えている事実を、もしこの場に企業の人事関係の方がいらっしゃいましたら、是非、分かっていただきたいと思います。

いろいろな事情により帰国後家族で過ごす時間は減少しても、電話やメールを駆使して家族のコミュニケーションの維持に努力されている様子が伺えます。それでは「帰国後、自分たちの家族と日本でずっと暮らす家族を比較した時、家族の関わり方に何か違いがあると思われますか」という質問をお聞きしてみたいと思います。何かお感じになっていらっしゃる方、いらっしゃいますか。高瀬さん、どうぞ。

高瀬　うちの家族は、日本でずっと暮らしている家族に比べて、簡単な言葉で言ってしまうと、仲が良いと思います。それは多分、海外に行って新しい環境に慣れるのに精一杯だった時にみんなで支え合いというか、一緒に乗り越えて来たということが大きいと思います。

何か困ったことがあった時、周りの友達の話を聞くと、みんな、まず友達に相談するって言うのですが、私ももちろん友達にも相談するのですが、家族にも迷わず相談するというところが、ちょっと違うのかなあと感じます。

司会　ありがとうございました。他の方いかがでしょうか。
西巻君のアンケートを紹介したいと思うのですが、「一般化はできませんが、ひとつ思うのは家族で修羅場をどれだけくぐり抜けて来たかが、家族の連帯感を高めることに繋がる。その修羅場を経験しやすいのが、海外に出た家族だと思います。」というふうにお書きになっていますけれども。

西巻　・・・はい。

司会　まあ、修羅場というのは別に海外だけでなく、日本でもいろいろ起こりうる訳ですよね。
たまたま、西巻家の場合は海外での色々なことだったということですね。

西巻　そうですね、はい。

司会　そうですか。ありがとうございました。ここで高橋さんの奥様が書かれたアンケートを紹介したいと思います。　「日本でずっと暮らす家庭にあっては、父親に対する感謝・尊敬の思いが不足していると思う。またその存在の大きさ、大切さをあまり感じていないのではないかと思う。
母親もそのことを子供たちに伝えていないように感じる。」と、奥様は書かれていますが、父親として充分感謝・尊敬されているとお感じになっていらっしゃいますか。

高橋　いや、あの、何を書いたか一切知りませんでしたので、今、初めて聞かされたのですが。日頃からもし、そう思ってくれているのでしたら嬉しい次第なのですけれども。今、私自身、別に日本でも海外でも変わらないと思います。まさに西巻さんがおっしゃった通りで、そういった経験をその家族で一緒に経験するっていうことが、ひとつの何か、その次につながって来るのではないのかなあと思います。それは、国内で転勤が多い家族もいらっしゃいますでしょうし、あるいは、海外に行かれる方もいらっしゃるでしょうし、あるいは、転勤がなくても色々、病気であるとか、色々なことがあると思いますけれども。そういったことに誰か一人が対応するのではなくて、家族がオープンに話し合って対応していく、そういったところから、家族で仲間意識というのもおかしな話ですけれども、そういったものができてくるのではないのかなというふうに思います。従いまして、今、隣で聞いていまして「修羅場経験」という非常にいい言葉を聞いたなあと思いました。実は会社で「修羅場経験」という言葉が流行っていまして。会社でリーダーを育成するのに修羅場を経験させなくてはいけないということで、色々と一番しんどい仕事をやらせようというようなことをマネジメント教育ということでやっておりますので。失礼な言い方ですが、
学生さんからそういう言葉を聞いて「スゴイなあ！」と感心した次第です。

― 海外経験がもたらした父親と子供の関係　―

司会　ありがとうございました。同じ質問の保護者のアンケートの結果から、「日本でずっと暮らしている家族に比べて父親が子供の教育に関わる」、「海外で一緒に行動してきたので家族関係が密接である」という答えが目立ちました。（保　１１）また、帰国生の結果から（帰　Ⅱ－４）は「日本でずっと暮らす家庭は子供が親に批判的な人が多く親子関係が冷めている」「日本の親は子供に無関心」という答えもありましたが、保護者、帰国生含めて一番多かった答えは「あまり変わらないのでは」という感想でした。
やはり、家族の関わり方において違いがあったとしても、それは海外滞在経験の有無ではないと、帰国生、保護者とも捉えているようでした。

さて、9月18日付の日経新聞の日曜版、「家族会議」に「父親と娘の関係」の記事がありました。その中で、オヤジ達はいつでも娘に対して「頼りになる、優しい、威厳のある」という存在でいたいが、娘の成長と共に母親とは「友達親子」のように密着度が高まる中、父・娘の関係が思春期と共に段々、疎遠になるということが書かれていました。

また先日発行の読売ウィークリーには「子供から逃げる父親たち」という特集記事が出ていまして、順調に育ってきたはずの息子や娘の突然の変調に遭遇した父親たちが、どう接していいか分からない。とりわけ子供を、子育てを妻に任せっきりにしてきた父親が「子供と向き合えない、叱れない」と書いてありました。

ここで、パネリストの皆様に現在の父親と娘の関係、父親と息子の関係について、何か海外での経験が影響していると思われるかどうかお聞きしたいと思います。

高瀬さんの場合はいかがですか。

高瀬　そうですね。海外で暮らしていた時は父親の帰宅時間が早くて、夕食を家族で食べることが多く、その時父親と会話ができたので、それが一番今父親と仲が良いということにつながっているのかなあと思います。高校１年生の時に、実はちょっと父に嫌悪感を抱いたことがあったのですが、たまたまそういう年頃だったのかなと今は思っています。今は人生の先輩として尊敬していますし、たまに恋愛の相談にものってもらっています。

司会　ありがとうございました。中嶋君の場合、父と息子の関係どうでしたか。

中嶋　海外経験の何が影響しているかと言われると、正直言って分からないですね。どう影響したか、どう良い影響、悪い影響を及ぼしたかどうか、自分の中で分かってないです。すみません。

司会　いえいえ。中嶋君が「人生の分岐点でいきなり父親に入って来られても無理だ」というようなことをおっしゃっていましたが。小さい時から、関わって欲しいと思っていらっしゃるのかな。

中嶋　そうですね。今父親は積極的に関わろうとしているのですけれども・・

小・中・高の時には、あまり関らず母親任せというか放任っていうんですかね。あまり、関わりは無かったですね。

司会　そうですか。ありがとうございました。西巻君の父と息子の関係はいかがですか。

西巻　高校の時、オランダでインター校に入りたての頃、一度、自分の宿題を全部父親がやってしまったことがあって。自分でやらなきゃ意味がないと思っていたのにそれをやられちゃったっていうことで、「もういいや！」って思ってしまったのです。日本に帰って来てから、大学３年、４年になって自分の進路を真剣に考える時になり、父親も高校卒業してからいろんな経験をしているので、今は人生だけでなく色々な話をして、「おもしろいなあ、良かったなあ」と思えます。

司会　今なら、父親と対等に話せると思っていらっしゃいますか。

西巻　そうですね。まあ自分の進路がちゃんと決まった時に、もう少し対等に話せると思います。

司会　ありがとうございました。高橋さんは、父親と息子、父親と娘の関係はいかがですか。

高橋　先ほど、申し上げたように４年半同じ経験をしたということが良かったと思います。今でも話ができていると思います。

司会　ありがとうございました。西谷さんのご家庭の場合はいかがでしょうか。

西谷　現在、距離的に離れていますので、メールとか電話あるいは、子供たちだけでお休みの間に主人を訪問という形でつながっています。いろんなことを・・進学とか就職の問題とかを話しているようです。母親では視野が狭いぶん、夫のグローバルな視野からの意見を知りたいという思いがあるようで、私が何も言わなくてもメールで相談をしています。

司会　ありがとうございました。アンケートに回答いただいた帰国生の 60%が現在高校生、28%が中学生です。その帰国生 225 名に「現在、悩みごとや困ったことがあった時に誰に相談しますか」と質問をしました。（帰 Ⅱ-２）年齢的にも 67%が「友達に相談する」と答えています。複数の回答が可能な質問ですが、59%の帰国生たちが「母親」にも〇を付けています。さてここで、父親に関してですが、「父親に相談する」と答えた帰国生は 25%もありました。しかし、大抵の帰国生たちは父親に単独に相談するというのではなく、「両親」として父親・母親、両方に〇を付けられていたのですが。思春期の中学生・高校生の 59%が悩みごとや困ったことがあった時には「母親」に相談し、25%が「両親」に相談するという結果です。それと共に、「自分の生活や生き方に影響を受けている人、尊敬できる人は誰ですか」という質問に対して「友人や先輩」、「学校の先生」を抜き「父親」と「母親」は１位と２位を分け合っています。（帰 Ⅱ－５）理由として「身近にいて一番相談し易い」「信頼している」「いつでも力になってくれる」と答えています。現在の日本の中学生・高校生の実態を考えた場合、かなり高いパーセンテージの帰国生たちが、帰国後も両親に対して高い信頼を置いているとアンケートの結果は示していると思います。海外生活体験者の５人のパネリストの方に、「海外赴任中の家族関係と帰国後家族関係はどう変わられたか」についてお聞きしてきました。会場の皆様には５つの家族のドラマがあったとご理解いただけたかと思います。

今回、パネリストの中で３人は大学の４年生でいらっしゃいますが、卒業後の進路・就職について、現在それぞれのお考えがおありだと思います。

そこで、「ご自身または、お子様の職業選択について家族がどう関われたか」「海外生活や異文化体験はその職業選択に何か影響していると思われるかどうか」うかがっていきたいと思います。高瀬さんの場合、いかがですか。

高瀬　私は就職活動を終えましたが、就職活動をしている時、両親にエントリーシートをチェックしてもらったり、企業についての情報を聞いたりしていました。特に「こういう仕事に就きなさい」ということは言われなかったので、自分で受けたい会社を自由に受けてみました。企業選びのポイントとして英語を使うチャンスがある、もしくは、海外の人と接する機会があるということです。最終的に来年の春から、ある大学の事務職員になるのですが、これは自分の今までの海外経験を活かして、日本で勉強している留学生たちのお世話をしたいと考えているからです。

司会　ありがとうございます。中嶋君の場合いかがですか。

中嶋　私は現在、大学の４年生ですが、卒業を１年延ばしてただ今休学中です。休学中にいろいろ旅行をして、自分の視野を広め、様々な文化に出会いたいと思いました。アメリカに来ていろんな人に出会って、日本では絶対経験できなかった事ができたので、それをぜひ他の国でも見てみたいなという気持ちがあったからです。私の就職活動に家族はあまり関わってないというか、母は良く気にはしてくれているのですけれども。心の中では旅行業界に就職したいと思っています。

司会　そうですか。お父様が言うべきことはないのでしょうか。

中嶋　特にないですが、母親がいらぬことを心配しているといっています。

司会　大学の学部専攻において国際貢献をしたいとおしゃってましたけれど、今もそのお気持ちはおありですか。

中嶋　はい、あるのですけど、就職活動をしているのでしばらくお預けです。

司会　西巻君の場合いかがですか。

西巻　自分は先ほどの話の中でも言いましたが、今はまだ進路が決まっていません。一応進学を希望しています。今の時点ではまだ確定ではないですが、教育学専攻なので教育学の研究科を受けることを視野に入れています。大学入学時から日本の教育に興味を持っていまして、それを自分の場合は海外の体験を基に考えられるというプライオリティーというか、アドバンテージとかあるので、それを活かしていきたいと思っています。家族がどう関わったかという点ではもちろん、今４年生のここに来るまで相当悩んだので、電話でもメールでも実家に帰った時も、父親単身赴任でアメリカに居るので本当にコミュニケーションが取りづらいですが、話を聞いてもらうことですごく支えてもらっています。

司会　ありがとうございます。高橋さんのご長男の職業選択についてはどのようなお考えですか。

高橋　私は企業の中で人事関係の仕事をしておりまして、企業の採用活動についても知識がありましたので、親として、また企業人としてアドバイスする、そんな形でいろいろな話をしたことを覚えております。その中で私が子供に言ったのは「会社は凄く変わってきている」と「会社というか、世の中変わってきている」と。たとえば、一昔前まででしたら４月入社がほとんどでしたが、グローバル化ということで９月入社。いわゆる海外留学を終えた方、あるいは日本でも国際系の学校を出られた方が新入社員として入ってくる。また、いわゆるキャリア採用つまり、途中入社の方が非常に増えております。一昔前、グローバルというとイコール語学ができる、だから海外での経験云々、そして言葉ができますというのが非常に大きなアドバンテージになったかと思います。今、企業の採用担当者の話を聞きますと、もう今や手紙、葉書ではなくてメールのエントリーシートが普通になり、ものすごい数のエントリーシートが来るそうです。それを一人の担当者が一日何百通も見るのです。テクニックを教え込む本も一杯ありますから、担当者もすぐに書き方がワンパターンだと分かります。そうすると全部はねられて、頭の２、３行見ただけでもう後を読まないそうです。そういう状況の中で「自分というのをどうアピールするのか」というその一点に絞って考えたらどうか、とアドバイスしました。

司会　ありがとうございます。西谷さんのご長女の就職に関してはいかがでしたか。

西谷　大学卒業までは本当に楽しく学生生活をすごしていて、大学３年生後半から４年生にかけての就職活動というのが一番子供にとって大きなでき事でした。自分の人格をすべて否定されるということもあり得るということで、すごく落ち込む時期なのですね。その時に親がどうすればいいのか、というのはすごく大きな問題なのです。特にうちの場合は父親が離れておりましたが、企業のいろんな事をアドバイスしていました。エントリーシートにどんなことを書けばいいかということもメールで送ってきていました。最初娘はそれが正しいと思ってそのとおりに書いていたら全部入口ではねられてしまって、すごくショックを受けたのです。やっぱり自分で考えなくちゃいけないということが分かったようです。父親のアドバイスを基に自分の言葉に代えて、何を自分が表に出していくかということを 3、4 ヶ月の間努力したことで、ものすごく子供が変わっていきました。

第３部

≪　海外体験者からのメッセージ　≫

―　家族の絆は強まったか　―

司会　ありがとうございます。第３部として海外体験者としての経験から、「日本の家族の在り方について」お聞きしたいと思います。これからの質問は私の方から特に指名しませんので、パネリストの皆様に活発な意見をいただきたいと思います。ここでアンケートの結果を報告したいと思います。「海外生活を家族で体験したことによって得たことはどんなことですか」という質問に対して帰国生たちは、「英語力、語学力が付いた」「視野が広まった」「異文化を知ることができた」といった回答以外に「家族で協力しあうことができた」「家族が仲良くなって助け合うようになった」と答えています。（帰 Ⅱ－７）一方保護者の 31％の方が「異文化体験によって日本を客観的に見るなど視野が広がった」「日本とは違う価値観に触れた」と答えています。また 37％の保護者たちが「家族で一致団結できた」「旅行・思い出等共通の体験が出来た」「家族一緒の時間を多く持てた」などと答えています。（保 １２）帰国生も保護者たちも、海外生活を家族で体験したことによって家族の絆が強まった。この目に見えない「絆」という言葉を実にたくさんの人が使っていました。ではパネリストの皆様に、海外生活を家族で体験したことによってこういった家族の絆は強まったと感じておられるかどうか、うかがっていきたいと思います。どなたかご意見のある方いらっしゃいますか。高橋さんはもしずっと日本に居たら家族の絡みが違っていたのではないかということを前におっしゃっていましたが。そういったことも含めて家族の絆、家族を見直すきっかけにもこの海外体験はなられたというお話でしたが、その辺はいかがですか。

高橋　今のご質問、もう少し大きく捉えさせていただいてよろしいですか。私は今回この依頼を受けまして、いろいろと考える機会をいただいたと思っています。特にその中で事務局の方からいただいた宿題に「最後に体験者からのメッセージを一言」というのがありました。一番難しい質問でした。まだ最後ではないかも知れませんが、この宿題にも関連するカタチで述べさせていただこうと思います。私がまず思い浮かべたのが「誰が決めるのか？」ということでした。話がちょっと飛ぶようですけども、仕事柄、海外の方と接することが多いのですが、以前クレームを受けたことがございます。成田空港、関西空港に着くと日本人外国人という矢印が出ていますが、こっちが Japanese、こっちが Alien と表示されています。「なんだ、高橋あれは」「俺たちのことをなんだと思っているのだ」と、こう言ったのですね。Alien という言葉は、もちろん辞書を引くと皆さんご存知のように、外国人という言葉があるのですけれども、もう一つは相容れないといったような言葉になっています。ところがイギリスに赴任した時、外国人登録をするために警察に行きそのフォームを見たら Registration of Aliens となっていたのですね。　私もカチンときました。冒頭申しましたように、こういうことを家族は一切知りません、想像もしなかったと思うのですね。私が異文化といいますか、想像もできないような未知の世界に飛び込ませたのでしょうね。その時に、「じゃ行きますか、行きませんか」と、家族に聞いても多分、判断が着かなかったのではないかと思います。不安ばかりで最終的に誰がそれを決めるのかというと、学校の先生でも、会社の上司でも、親戚でもなく、親が決めるしかないと思います。そうなった時、父親の役割として現地に関するいろんな学校生活などを含めた情報を集める、それから現地に行ったら、アッシーとなってこまめに水先案内人をする、帰ってきたらやはり責任を取る、こういうことではないでしょうか。誰が決めるのかということでもう一つ有るかと思います。それは今申し上げた自己の責任だと思います。

「成功しましたか、失敗でしたか」とよく言われます。マスコミに取り上げられますのは成功事例の一部と失敗事例の一部です。大半はその間にあるのではないかと、ただその大半の部分はどこにも出てこないのではないのかと思います。ところがマスコミ報道などで成功事例がアピールされればされるほど、人間はそちらの方に希望といいますか、ぜひ息子もそうなって欲しいと思うのですが、それはほんの一部じゃないかなと思います。では「成功したか、失敗したか」誰が決めるのですかというと、これやはり家族じゃないのかなと思います。何故ならば、成功と失敗の定義、これは無いと思うのですね。だからこそ家族として、「よかったね」と思えたら、私はそれでいいのではないかなと思います。一緒に考えて、一緒に決めて、一緒に責任を負う、そんな家族になれたらいいなと思います。じゃお前のところはどうなのだと言われますと、それはすみません、ちょっと横に置かせていただいて、自分だけではなくて周りのご家族など見せていただいて、そういったことを感じた次第です。したがいまして「家族の絆は強まったと感じますか」と、いう質問に対して私は私の家族としてはそう思います。ただ、他の方から見られて「高橋の家は」と言われたら、それは分かりませんし、それを私は知りたくも、知ろうとも思いませんということで回答とさせていただきます。

司会　ありがとうございました。高橋さんがおっしゃった「何を持って成功とし、何を持って失敗とするか。他の家庭から、自分の家族からどう思われようと自分の家族はこれでよかったと思えるものがあればいいのではないか」というお話だったと思うのですけれども。最近海外赴任の若年化で、帰国した若いお母さまから小学校受験の質問や英語保持教室の問い合わせが増えております。フレンズとしては日本に帰られてまず日本の勉強についていくこと、日本のお友達をたくさん作ることが最優先だとお話しています。海外生活をすぐ子育ての勝ち負けに転じて考えられる方が確かに多いように思います。海外の生活、教育に関しても、帰国後の教育に関しても、こうならなかったら失敗、こうなったから成功と決め付けてはいけないという高橋さんのお考えを、フレンズもしっかり受け止めたいと思います。パネリストの皆様方、大分お疲れのことと思いますのでひとまずここで 20 分程の休憩を入れたいと思います。休憩後、パネルディスカッションの続きと、会場の皆様からいただいた質問を基に質疑応答、総括討論をさせていただきたいと思います。

―――――――――― 休憩 ――――――――――

進行　それではちょっと時間が過ぎておりますので、皆さんからいただいた質問を基にした質疑応答を含めまして、先ほどの続きと総括討論を進めさせていただきます。たくさんご質問をいただきましたが、今回のテーマは「家族」ということになっておりますので、申し訳ございませんが、そちらを中心に質問は取り上げさせていただきます。その他お答えできる分に関しては、お名前、ご住所いただいておりますので、あとから個々に回答させていただきたいと思いますのでご了承ください。それではお願いいたします。

― 日本の教育や社会現象について ―

司会　パネルディスカッションの続きをさせていただきます。海外体験者からのメッセージということで、こちらが用意した質問を先にさせていただきまして、その後会場からの質問に移らせていただきたいと思います。

日本の教育や社会現象について、何か疑問に思ったり、違和感を感じたりしていることがおありでしょうか。また日本において、家族が機能していないと思うでき事や社会現象があると思われるでしょうか。ご意見のある方、活発にお話しいただきたいと思うのですけれども。どなたかいらっしゃいますか。

西巻君は日本の教育を学んでいらっしゃいますが、そういった教育の面についてはいかがですか。

西巻　すごく大きな話で答えるのが難しいのですが、今卒論で興味を持っていることだけお話します。　「帰国生の進路選択における学校の役割」というものに注目しています。それは先ほど伊藤さんのお話の中でもありましたが、今すごく社会が変化していて学校の中でもそれにどう対応していくかが大きな課題です。今までは受験指導とか言われたりしていましたが　これからは特に進路のことに関して高校でどういう指導を行っていけばいいのか、ということに私は注目しています。そういうときに帰国生の視点から見たら何かヒントが得られるのではないかと思っています。

司会　帰国生の視点からご覧になって、たとえば日本の小学校の国際理解教育などはどのように考えていらっしゃいますか。

西巻　大学に入った当初は国際理解教育というのに関心を持って自分でも何かしたいと思っていたのですが、やはりすごく難しくて、形の上での国際理解に終わってしまうところがあると考えています。小学校の場合は年齢が低いこともあって単なる交流で終わってしまうこともあると思います。私は自分の海外体験や障害者との体験からも、ぶつかり合わなきゃ始まらないというか、絶対相手を理解するのに壁にぶつかると思っています。そういう難しい面も含めた国際理解教育というものならば実施されても良いと思っています。

司会　この間、西巻君は海外滞在体験を持たなくてもひとりひとりの子供が異文化を持っているということをお話してくださったのですが、その子その子の文化を先生が尊重してあげてほしいとお考えですか。

西巻　それがやはり一番大切なことじゃないかなと思います。日本の普通の学校でも他の土地からやってきたりする人はいますし、それこそ家庭の背景は違っているので、それぞれの見方、考え方があると思います。それを異文化と認めて、考えて、そういう考え方を教育の中に進めていけたらと思います。

司会　ありがとうございます。ほかにどなたかそういう違和感を感じられていらっしゃる方がおられますか。高瀬さんどうぞ。

高瀬　日本において家族が機能していないと思う社会現象なのですけれども、少し前に新潟で少女の監禁事件があったと思うのですが、あのニュースを聞いたとき私が「えっ」と思ったのは、犯人だった息子が自分の部屋に少女を 10 年間監禁していたということです。これを母親が何も知らなかったと言っているのですが、これは本当にありえないことだと思いました。自分の息子の部屋に女の子が 10 年間もいたら、さすがに気づいていたと思います。たぶん気づいていたけれども見て見ぬふりをしていたのではないかなあと思いました。この見て見ぬふりをするというのは日本人特有って私がここで言うのもおかしいですが、海外に住んでいた時にはそういうような事件は起こることはないと思ったので、何か日本の家族は今おかしくなってきているのかもしれないなあと漠然と思いました。

司会　ありがとうございます。

西谷さんは、アジアの子供たちはもっと質素で働かなければ生きていけない環境にあり、日本の子供たちは経済的にも時間的にも豊かさがあるあまり、エネルギーが何か違う方に使われているのではないかというように前に話されましたが、今もそのように思われていますか。

西谷　そうですね。アジアに滞在して感じたことは、大学を出ることはものすごくエリートなのですね。自分が選択してそういう道を歩むっていう覚悟の上で大学生になって、社会に出て行くという形が見られるのです。また、生きるために働くというのが切々と感じられてくるものがありました。努力したらした

だけの報酬がある、たとえば英語の勉強をすると時給が良くなる、そういうような形で生活のための努力というものが見られました。日本に帰り感じたことは、みんながこうだからこうしなくてはいけない、みんなが大学に行くから当然行くというような考えで、子供も親も何かあまり疑問を持たずに塾とかいろいろな情報に流されているような気もします。実際うちの子供たちもそういうところであまり悩まなかったというのは、流されている部分があったのかもしれません。やはり自分が何をしたいのかという子供から発信するものを、もうちょっと小さいうちから育てていかなくてはと思います。本当に自分が大学に行って何を学びたいのか、将来何をしたいのかわからないままに社会に出てしまっては親から離れられない、自立できないということになってしまうのではないかと不安を感じます。

— 日本の父親像・母親像 —

司会　ありがとうございました。
それでは会場の皆様からいただきました質問に対しての質疑応答に移らせていただきたいと思います。たくさんのご質問をありがとうございました。先ほども申し上げたように時間の都合上残念ながらすべての質問に対してパネリストの皆様方にお答えいただくわけにはいきませんけれども、時間の許す限り続けていきたいと思います。非常にいろいろな角度からの質問があるのですが、今回のシンポジウムは「家族」というテーマでございますので、テーマに沿った質問だけを紹介させていただきたいと思います。
「一般的な日本の父親、母親像に対して海外生活を通じて何か提言したいことはありますでしょうか」　ご自身の将来と重ねて自分はどういう親になりたいだとかそういうことでも結構です。どなたかそういったことでお考えのある方いらっしゃいますか。　西巻君よろしくお願いします。

西巻　一般の日本の父親がどうこうという風に考えるのをまずやめたらいいと思います。父親も母親も　その家族その家族（それぞれでよい）と思っているのでまずそういうところから考えるのが大事だと思います。

司会　ありがとうございます。他の方はいかがでしょうか。中嶋君のお宅はお父様が仕事で非常に忙しくて家族ともあまり関わりがないというふうにおっしゃっていましたが、ご自分が父親になるときは、どのような父親になりたいと思っていらっしゃいますか。

中嶋　うちの父親のことは非常に、尊敬しています。家族のためにすごく働いてくれて自分を大学まで通わせてくれて、感謝の気持ちでいっぱいですが、自分の将来像を考えると　もう少し子供の成長に関わっていきたいなと考えています。

司会　ご自身はお父様のことは尊敬もしているし理解もできるけれども、自分は違う父親像を目指したいという感じですね。

中嶋　はい。

— 海外赴任家族、帰国家族へのメッセージ —

司会　それでは次の質問に移らせていただきます。
「これから海外赴任をする家族に対して、またもうお帰りになったご家族に対して何かメッセージはおありでしょうか」ということですがいかがでしょうか。西谷さんどうぞ。

西谷　帯同する子供の年齢にもよると思うのですが、とにかく親自身がいろいろなことに興味を持って前向きに

良い面を見つけて、その滞在国を好きになることですね。外からの日本が見えてくるのです。日本人がどうだってことがだんだん子供ながらも感じてきますので、いろいろなことをひっくるめて前向きでいく親の態度というのはとても子供に伝わっていくと思います。明るく前を向いてという形ですね。それと前のお話で高橋さんの奥様のアンケートにもありましたように、これは難しいのかもしれませんが、妻の立場として夫を信頼するということ、感謝して信頼して本当に仲良くいることが子供たちへの一番のプレゼントではないかな、これはたぶん海外にいても日本にいても同じことだと思いますが、自分にも言い聞かせています。

司会　今のお答えに関わるのですけれど西谷さんに対して質問がきておりましてお読みしたいと思います。
「私の主人も単身赴任をしております。ご主人のためファミリーデーはとても良いアイデアだと思います。子供の成長や時間の経過と共に父親の影、形が薄くなりがちです。奥様、お母様である西谷さんはパイプ役としてどのような努力をなさいましたか」ということですが、今のお答えのようにまずは父親との信頼関係、妻としても母親としてもそのように努められたということですね。

西谷　そうですね。年末に主人から「温泉でも行きたいなあ」というメールが入ったのです。子供たちに話したら「温泉、いいねえ」ということで近くの旅行会社に行きましたがもう予約でいっぱいでした。でもキャンセルがでてきましたということで　箱根に一泊旅行に出かけました。子供たちが「合宿みたいだねえ」と言いながら五枚布団を敷いて雑魚寝をして浴衣を着てみんなで大騒ぎをしたのですけれど、すごくうれしい時間でした。そういう風に企画が出るといろんなガイドブックを見て「今度どこへ行く」「どこに食べに行こうか」ということは提案するようにしています。

―　再び海外赴任したいか　―

司会　アンケートでも、帰国生の 72%が海外でもう一度生活したいと答えています。（帰 Ⅱ－８）
「パネリストの皆さんもそういう機会があれば、また海外で生活したいですか」という質問がきておりますけれども、どうでしょうか。　お一人ずつうかがっていきたいと思います。
高瀬さんいかがですか。

高瀬　そうですね。今の就職先では、ちょっと海外に行くと言うことは無いと思うのですが、もし将来自分の旦那さんが海外赴任する人だったら絶対について行こうと思っています。

司会　ありがとうございます。中嶋君はどうですか。

中嶋　アメリカでの体験はかなり貴重なものなので、語学力を活かした仕事なり、そういう機会があれば、ぜひ海外に行きたいと思っています。

司会　ありがとうございます。西巻君はいかがですか。

西巻　自分は仕事かどうか分からないけれども、留学とかそういう形で、海外でまた生活したいなと思っています。

司会　高橋さん、いかがですか。

高橋　はい、ぜひまた機会があればと思っています。

司会　西谷さん、いかがですか。

西谷　私はもう５人で一緒に住むということは、就職してしまった子供がいますので難しいとは思いますが、行ったり来たりという形で海外に触れていたいとは思います。

司会　ありがとうございます。それでは、引き続いて質問にまいりたいと思います。
「カルチャーショックからの心の戸惑い、ストレスを、自分達は、親としての立場からは、どう乗り越

えてらしたか」という質問が来ています。「高橋さんの言葉から父親として同じ様な思いを感じることができます。ありがとうございます。」と言うことですけれども、カルチャーショックからの心の戸惑い、ストレスをどう乗り越えてきたかということですが、親として子供の状態を見てとか、自分自身ということもあると思うのですけども、何かお話下さる方いらっしゃいますか。　カルチャーショックとか、学校の問題などについては皆さんおっしゃっていましたが、
ストレスということは皆さんおっしゃっていませんでしたので。高瀬さんいかがですか。

高瀬　カルチャーショックはカルチャーショックとして受け止めて、「あ～、日本はこういう国なのだ」と思って生きてきたので、乗り越えるということは余り無かったように思います。それよりも受け止めました。

司会　高瀬さんはちょっと日本の「いじめ」のことを前におっしゃっていましたが、何かそう言ったことをお感じになったことがありますか。　日本には「いじめ」があるということを。

高瀬　そうですね。個人的なことになってしまうのですけれども、タイのインターナショナルスクールにいた時と、日本に戻ってきて通った中学を比較すると、インターナショナルスクールにいた時はクラスに嫌いな子がいたとしたら、「あなたが嫌いだ」とはっきり本人に言って「そう、私もあなたが嫌い」というふうに堂々とを言ってしまうということを私は当たり前だと思っていたのです。日本の中学に帰って来て、「いじめ」みたいなことが実はありまして、その時にそのいじめ方が陰湿で、陰でコソコソと悪口を言ったりとか、そういうことが多かったので。

司会　日本の「いじめ」は陰湿ですか。

高瀬　はい。

司会　自己主張ができない教育の状態に問題があるのではないかということかもしれないのですが。
どうもありがとうございました。
それでは、そろそろ閉会の時間が近づいてまいりましたので、これで質疑応答を終わりにさせていただきたいと思います。

西巻　どうしても今考えていることを言いたいので、最後に一言付け加えさせていただきます。
ここに来ている方は、凄く理解のある方々だと思うのですよ。親も理解しようとしていますし、子も理解しようとしている。ただ、ここに来ることができなかった人や、来ようとしない方々こそ、悩みを抱えていると思うのです。それで、人の家族だから、他人が何かをすることはできないかも知れないですが、それこそこの場で考えたことを分かちあいたいと思います。
せっかくの貴重な時間だったので、是非皆でそういうことをしようではありませんか。

司会　ありがとうございます。是非、実現させて行きたいと思います。
本日は、２時間にわたりまして「家族」をテーマに海外体験者であります５人のパネリストの方々のお話を伺ってまいりました。お話の中に心に残る言葉が沢山ございました。海外赴任に伴い父親も母親も、子供たちが現地でソフトランディングできるために、生活面でも教育面でも懸命に関わろうとします。送り迎え一つについても関わらざるを得ない環境でもある訳です。帰国生たちは海外で自分が困った時、辛かった時、親がしてくれた一つ一つのことをアンケートの中で実に良く覚えています。また、親たちの方も仕事の面で、生活の面で、苦労したり、傷ついたり、失敗したりする姿を、子供たちの方にさらけ出す環境でもある訳です。そういった親の苦労や弱さをも知って、帰国生たちは当たり前と思っていた親の行為に対して非常に感謝の気持ちを持ち、また完璧だと思っていた親に対して「親近感」が生まれ、親子がお互いに一歩踏み込んだ「理解」なり、そしてその親と子が一緒に過ごした沢山の時間の中で、多くの海外体験者が感じる「家族の絆」というものを作っている様に思われました。

子供たちにとって「家族の繋がりが見えない時代」と言われる現代にあって、こういった海外体験者からの発信が、会場の皆様のご家族、また日本の家族を見直すきっかけや、ヒントになれば「フレンズ」としても幸いでございます。
今日は本当にありがとうございました。

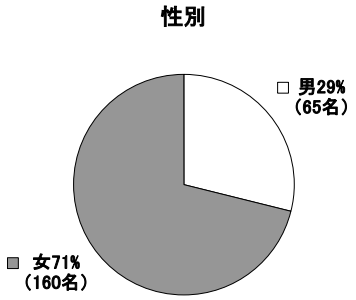
参考資料

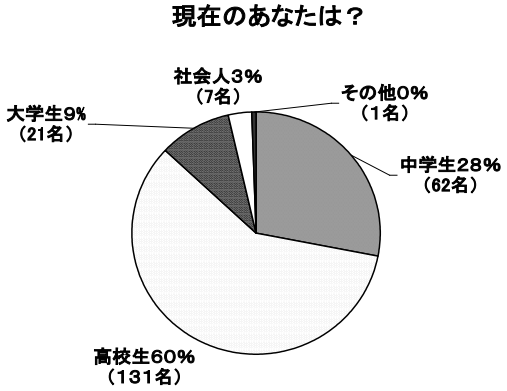
『 海外滞在中および帰国後の「家族関係」についての帰国生・保護者へ事前アンケート 』

集　計　結　果　報　告

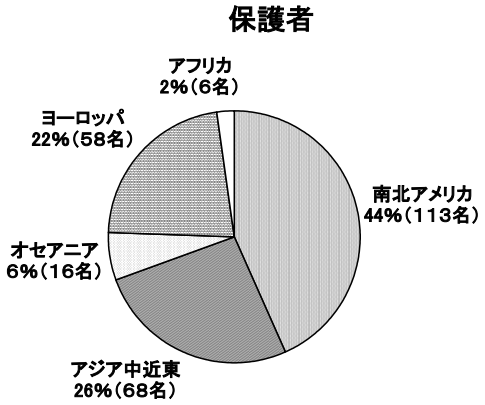
2005 年 4 月から 9 月にかけて「家族」をテーマにしたアンケートを実施いたしました。最近家族のあり方が問われています。フレンズでは帰国生(225 人)と保護者（197 人)から回答をいただきました。
シンポジウムに関連したデータの中から一部掲載いたします。（一部複数回答あり）

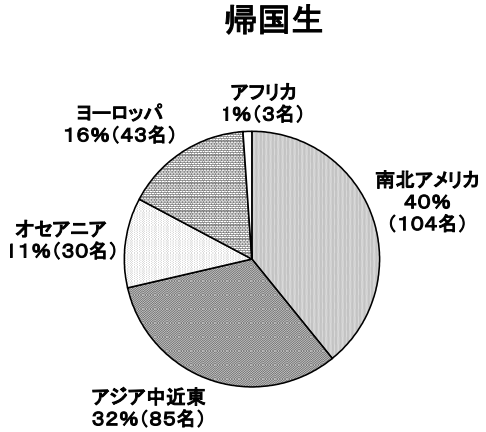
◆アンケート回答者（帰国生）の内訳



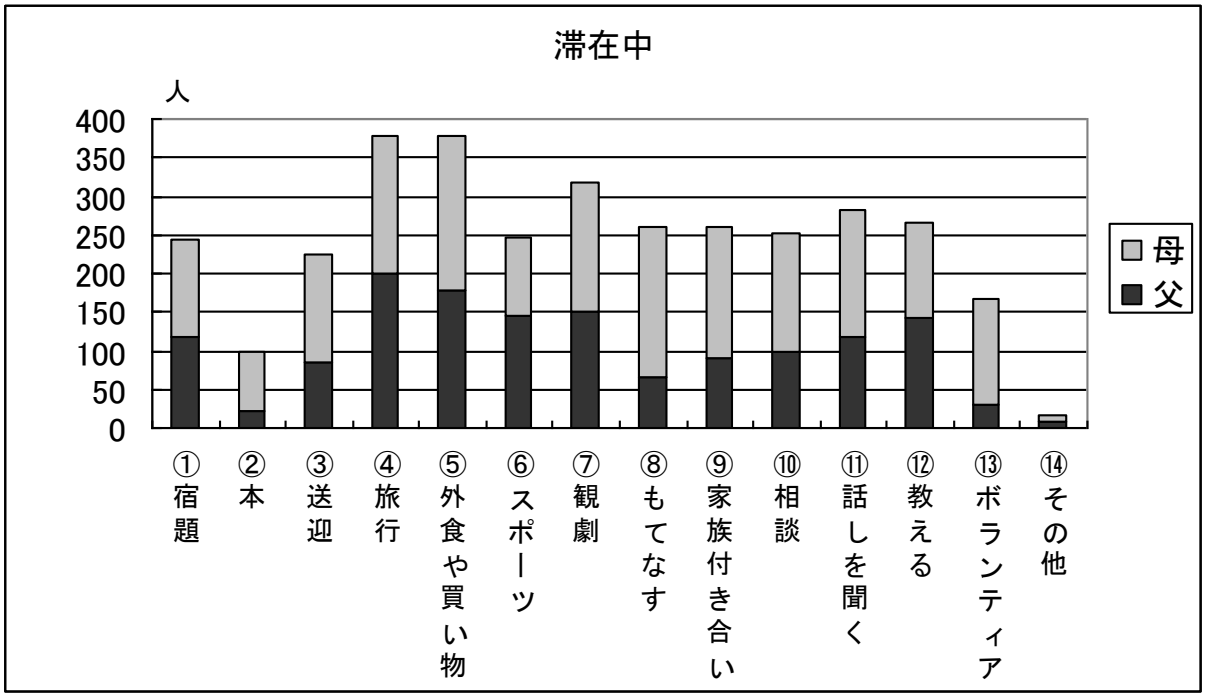


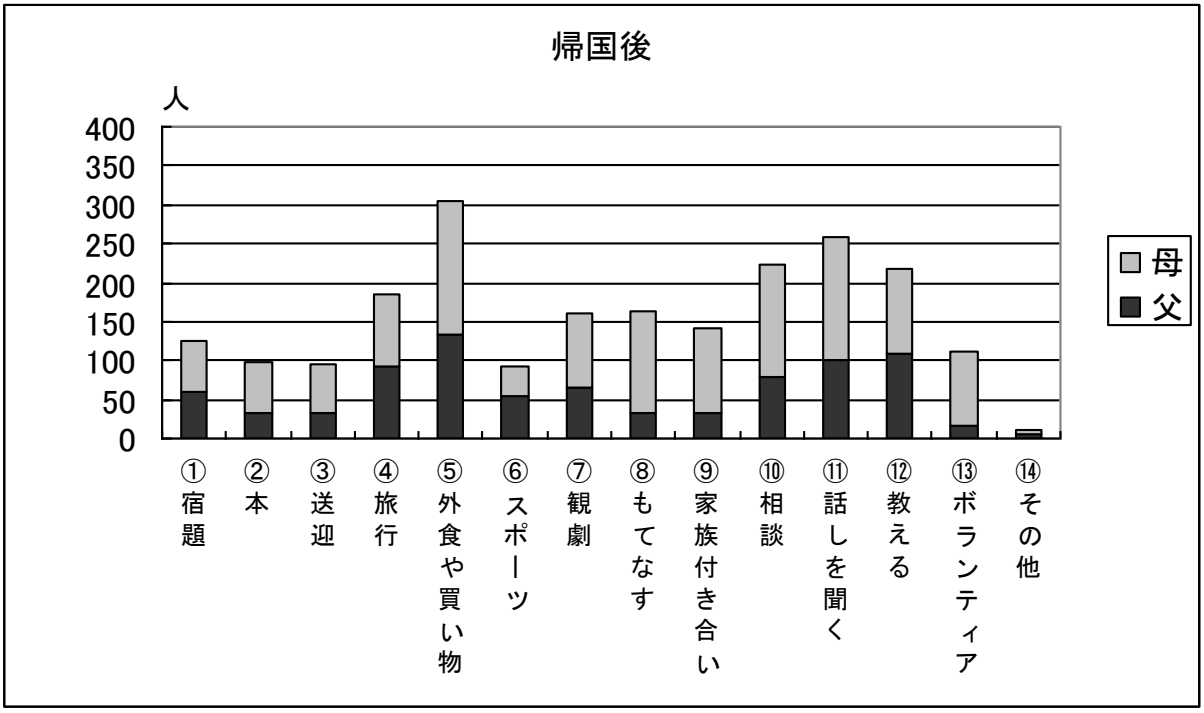
１．滞在していた国はどの地域ですか？





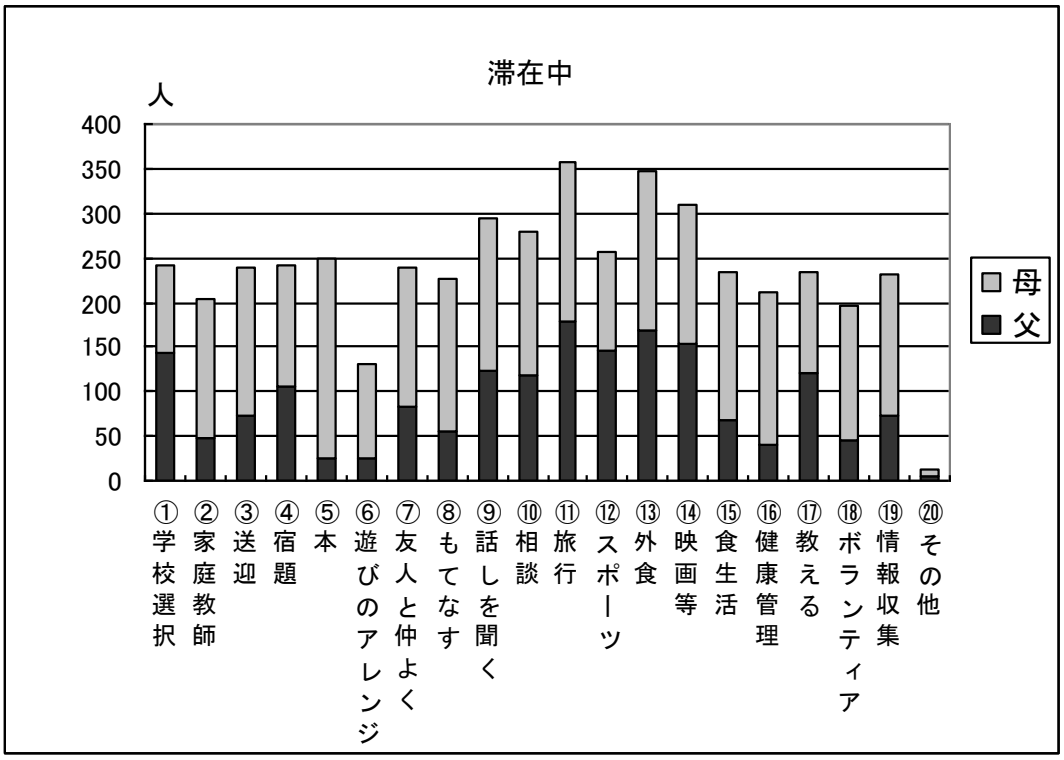
２．帰国生が海外滞在中、帰国後に父母にしてもらって良かったこと

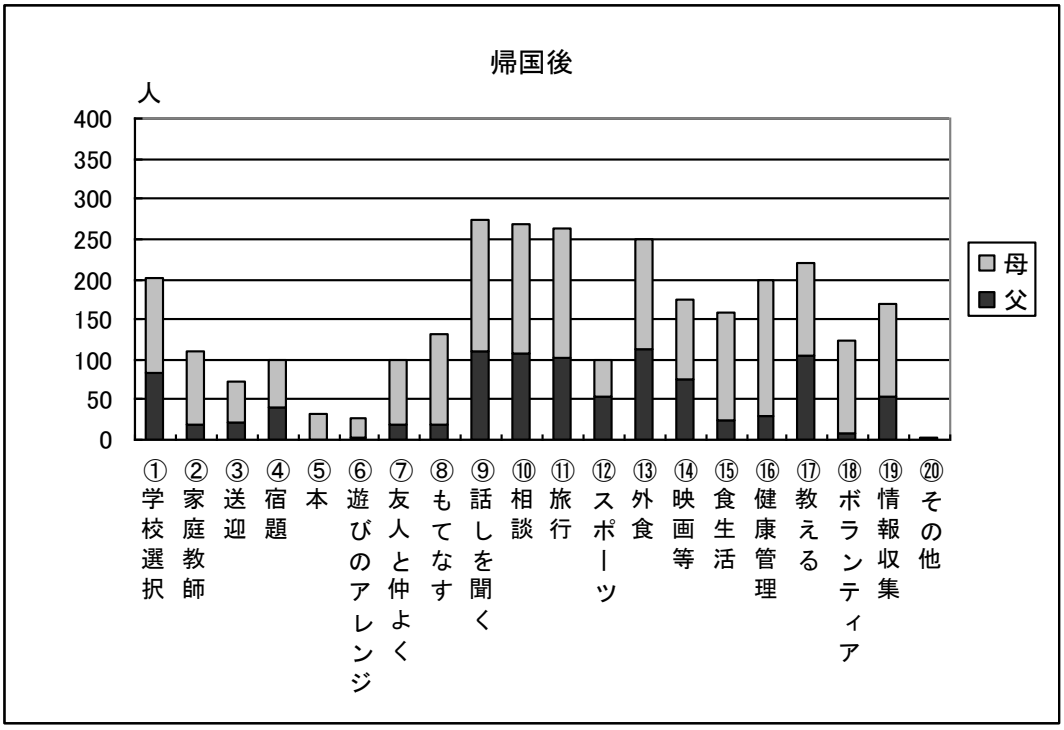




①宿題を手伝ってくれた ②本を読んでくれた ③送迎をしてくれた ④旅行に連れて行ってくれた ⑤一緒に外食や買い物に出かけた ⑥一緒にスポーツをした ⑦一緒に映画・観劇・音楽会・スポーツ観戦などに出かけた	⑧友達が家に来た時にもてなしてくれた ⑨友達の家族と仲良くしてくれた ⑩困った時に相談にのってくれた ⑪話を聞いてくれた ⑫世の中の色々なことを教えてくれた ⑬学校にボランティアに来てくれた ⑭その他

３．保護者が海外滞在中、帰国後に家族・子どものために心がけたこと

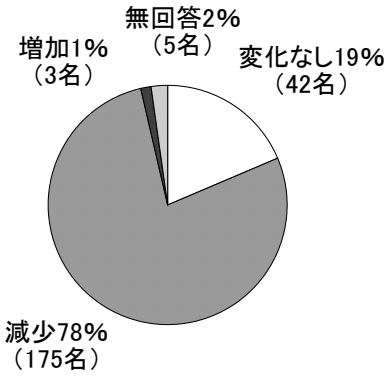




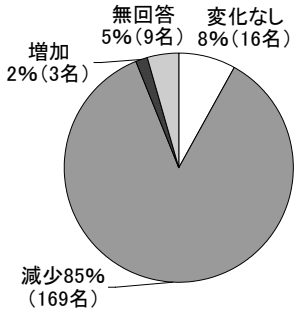
①　受入れ体制などを考慮した子供の学校選び	⑪　一緒に旅行に行く
②　子供にあった習い事や家庭教師を探す	⑫　一緒にスポーツをする
③　子供の送迎をする	⑬　一緒に外食や買い物に出かける
④　子供の宿題を手伝う	⑭　一緒に映画、音楽会、スポーツ観戦に出かける
⑤　子供に本を読み聞かせる	⑮　食生活及び食品の調達に努める
⑥　子供が生活に早く溶込めるよう遊びなどのアレンジをする	⑯　健康管理に気を配る
⑦　子供の友達の家族と仲良く付き合う	⑰　世の中の色々な事を教える
⑧　子供の友達が家に来た時にもてなす	⑱　学校のボランティアに行く
⑨　子供の話しを聞く	⑲　進路に関する情報収集
⑩　子供が困った時に相談にのる	⑳　その他

４．帰国後の生活の時間の変化

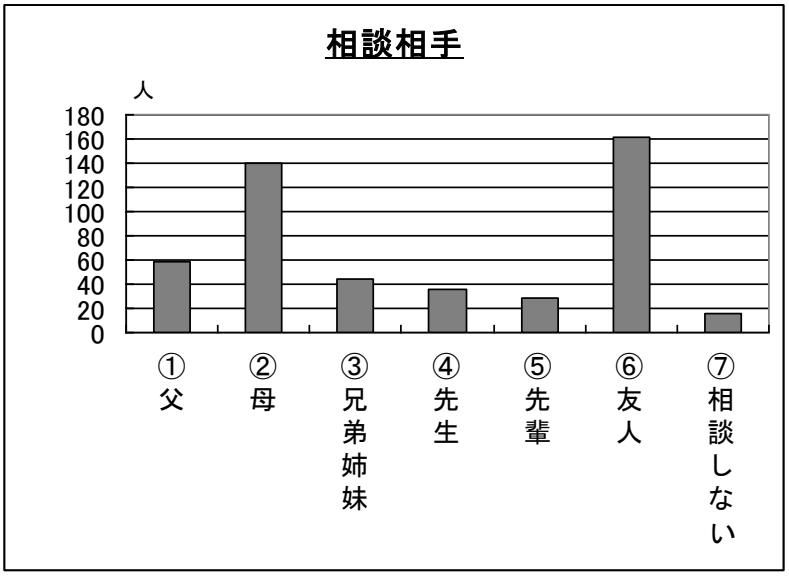
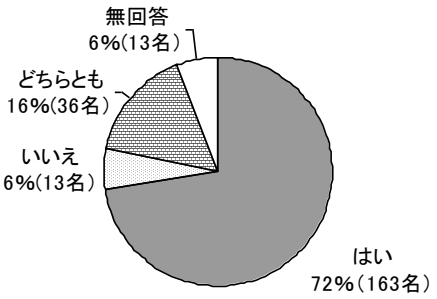
帰国生



保護者



５．帰国生の相談相手



６．再度渡航したいですか？